

佐田南浦遺跡（第2次・第3次）発掘調査報告

2005（平成17）年12月

三重県埋蔵文化財センター

佐田南浦遺跡（第2次・第3次）発掘調査報告

二〇〇五（平成十七）年十二月 三重県埋蔵文化財センター

序

本書で報告する佐田南浦遺跡は、度会郡玉城町に所在する古代から近世にいたる遺跡であります。玉城町は伊勢神宮の鎮座とともに神領となり、それ以来神宮と深い関わりを持ちながら歴史を歩んできた地域と言えます。中世以降の動乱期には、多くの武将たちが主導権争いを繰り広げた舞台にもなりました。また、近世には伊勢参宮の宿場町として繁栄し、現在県指定史跡となっている田丸城周辺には、今なお城下町としての佇まいが残されています。

今回の発掘調査では、このような地域に残された往時の人々の足跡を、断片的ながらも垣間見ることのできる資料が得られました。今回報告するのは、佐田南浦遺跡の第2次・第3次調査の記録であります。本書が郷土に残された貴重な歴史遺産を、未来に伝える一助となれば幸いと存じます。なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの関係者の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成17年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水 康夫

例 言

- 1 本書は、三重県度会郡玉城町佐田字南浦に所在する佐田南浦（さたみなみうら）遺跡の第2次・第3次発掘調査報告書である。
- 2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成15・17年度玉城駅前線地方特定道路整備事業である。
- 3 発掘調査は下記の体制で実施した。
第2次調査
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅱグループ 小山憲一 大村伸一
作業委託 東海興行株式会社
第3次調査
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅰグループ 穂積裕昌 新名 強
- 4 本書が対象とした実調査面積は、次のとおりである。
第2次調査：520㎡
第3次調査：15㎡
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、次のとおりである。
第2次調査：平成15年10月16日～平成16年1月15日
第3次調査：平成17年7月15日
- 6 調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が全額負担した。
- 7 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書の執筆・編集及び遺物の撮影は、小山憲一が行った。
- 9 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、玉城町都市計画図、三重県県土整備部作成の事業計画図である。
- 10 本書で示す方位は座標北を用いた。座標は世界測地系に準拠し、国土座標第Ⅵ系を用いた。なお、磁針方位は西偏6度30分、真北方位は西偏0度21分である（平成9年）。
- 11 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。なお、遺構図のうち「S」で示した部分は、石を表している。
SK：土坑 SD：溝 SZ：落ち込み SA：柱列 Pit：小穴
- 12 本書で使用する用語は、以下に統一している。
つぼ：壺 わん：椀 なべ：鍋 ほうろく：焙烙
- 13 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（21版、日本色研事業株式会社、1998年）に準拠した。
- 14 挿図と写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。

本文目次

I 前 言	1	2 遺 物	15
II 位置と環境	4	(1) 出土遺物の概要	15
III 第2次調査	6	(2) A地区	15
1 遺 構	6	(3) B地区	15
(1) A地区	6	(4) C地区	20
(2) B地区	8	IV 第3次調査	25
(3) C地区	13	V 結 語	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡地形図	1	第16図 C地区遺構平面図	13
第2図 調査区位置図	2	第17図 C地区土層断面図	13
第3図 遺跡位置図	5	第18図 SK30・SK32・SK33・SD 29埋土断面図	13
第4図 A地区遺構平面図	6	第19図 A地区出土遺物実測図	15
第5図 A地区土層断面図	6	第20図 B地区B2-Pit1・SD27出土遺物 実測図	15
第6図 SK13・SK18実測図・埋土断面図	7	第21図 B地区SD20出土遺物実測図	16
第7図 SD12・SD14埋土断面図	7	第22図 B地区SZ19・SD22・SK28・ SK24出土遺物実測図	16
第8図 B地区遺構平面図	8	第23図 B地区SD25出土遺物実測図	17
第9図 B2-Pit1遺物出土状況図	8	第24図 B地区包含層等出土遺物実測図	19
第10図 SD27・SD26埋土断面図	8	第25図 C地区出土遺物実測図	20
第11図 B地区土層断面図	9	第26図 D地区平面図・土層断面図	25
第12図 SA21実測図・柱痕出土状況図	9	第27図 第1次・第2次調査遺構平面図	27
第13図 SD20遺物出土状況図・埋土断面図	10	第28図 調査区位置図	27
第14図 SD20遺物出土状況図・SK24埋土 断面図	11		
第15図 SD25礫出土状況図・埋土断面図	12		

挿 表 目 次

第1表 遺構一覧表	14	第4表 出土遺物観察表(3)	23
第2表 出土遺物観察表(1)	21	第5表 出土遺物観察表(4)	24
第3表 出土遺物観察表(2)	22		

図 版 目 次

図版1 A地区全景/A地区SK13・SK18完掘状況	図版5 C地区調査前状況/C地区全景
図版2 A地区SD11・SD12	図版6 出土遺物(1)
図版3 B地区調査前状況/B地区全景	図版7 出土遺物(2)
図版4 B地区SA21柱痕出土状況/B地区SD20 遺物出土状況	図版8 出土遺物(3)
	図版9 出土遺物(4)

I 前 言

1 調査に至る経過

佐田南浦遺跡は、JR参宮線田丸駅前道路の拡幅及びロータリー部分の建設事業に先立ち行われた遺跡分布調査で発見された遺跡である。平成11～12年度にかけて行われた範囲確認調査で、事業予定地内に遺構が確認されたため、開発部局と協議を行った結果、現状保存が不可能の部分について発掘調査を行い、記録保存することで合意した。なお、駅前のロータリー部分の事業主体は玉城町で、当該部分については、平成14年度に玉城町教育委員会によって調査が行われており、掘立柱建物3棟、溝2条などの中世の集落跡が確認されている^①。

本書で報告するのは、玉城町教育委員会が実施した第1次調査に次ぐ第2次・第3次調査にあたり、駅前ロータリーに接続する県道整備事業に伴い実施したものである。なお、遺跡の名称については、第

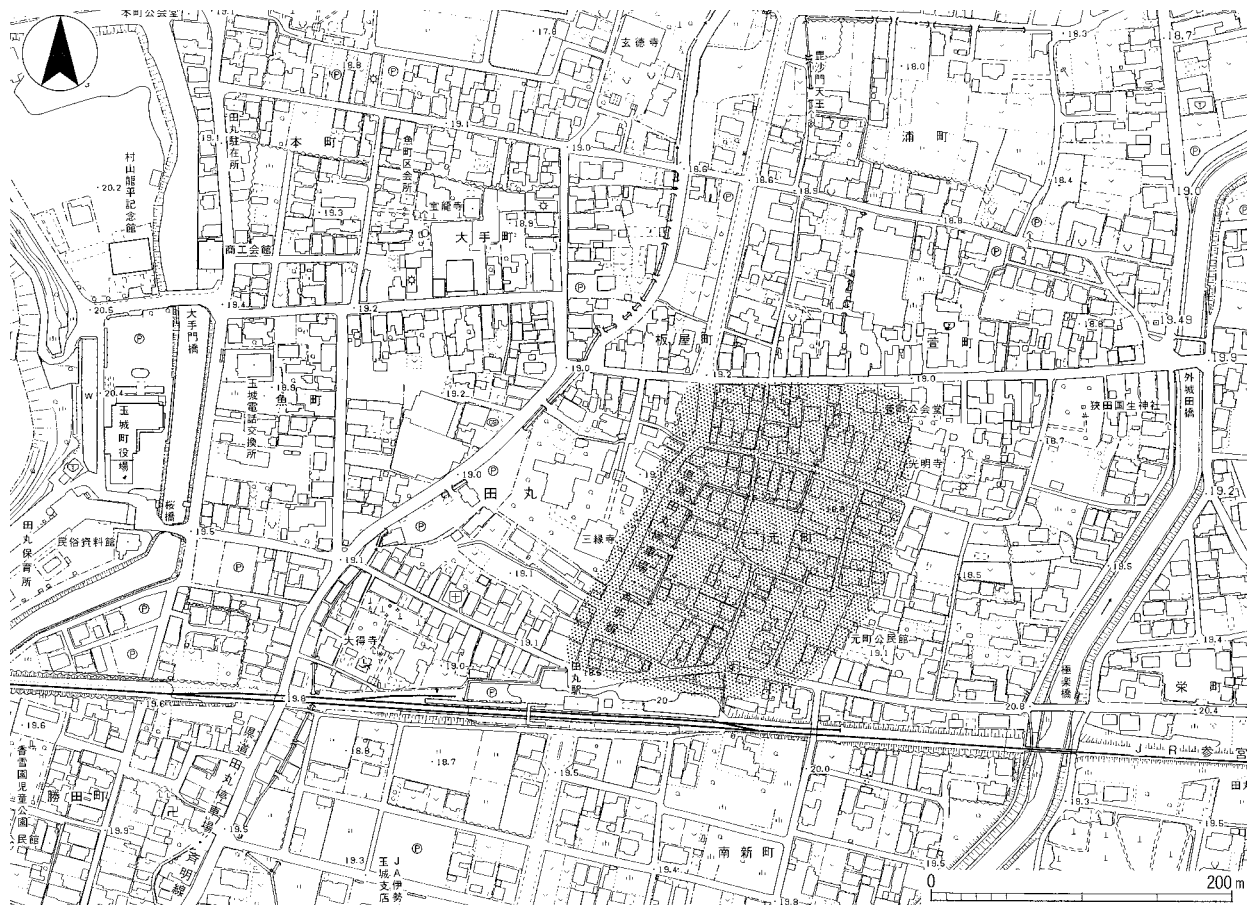
1次調査の時点では「南浦遺跡」であったが、他市町村に同名称の遺跡が存在することから、大字名の「佐田」を付加し「佐田南浦遺跡」と改称した。

2 調査の経過

(1)調査経過の概要

第2次調査 調査地は駅前の住宅密集地で、なおかつ交通量の多い道路に面していたため、資機材の搬出入や作業中には常時交通整理員を配置した。また、A～Cの3調査区はいずれも狭小で、B地区では掘削に伴う排土の仮置き場が隣接地に確保できなかったため、調査区北側の一部分の調査を割愛し、排土運搬車の待機場にあてた。

現地調査は、11月4日にB地区から開始した。秋雨前線の影響で、調査開始当初は天候不順で調査が若干遅延したが、一部の遺構実測を残し、12月3日午前で終了した。A地区は、12月3日午後に着手し



第1図 遺跡地形図(1:5,000)

た。検出遺構は溝数条と土坑のみで出土遺物も僅少であったため、12月24日には調査を終了した。調査着手当初の天候不順の影響で、残るC地区の年内終了が困難となったため、新年に繰り越した。C地区は1月6日に着手した。わずか100㎡ほどの面積で、遺構・遺物ともに少数であったため、1月15日には全工程を終了し、翌16日に現場詰所を撤収した。

第3次調査 調査地は第2次調査B地区の南側に隣接する酒類販売店の住宅兼用店舗跡地に位置する。平成17年7月15日、建物撤去後の工事施工時に立会い調査を行った。調査対象面積が僅か15㎡であったため、調査は即日終了した。

(2)調査日誌(抄)

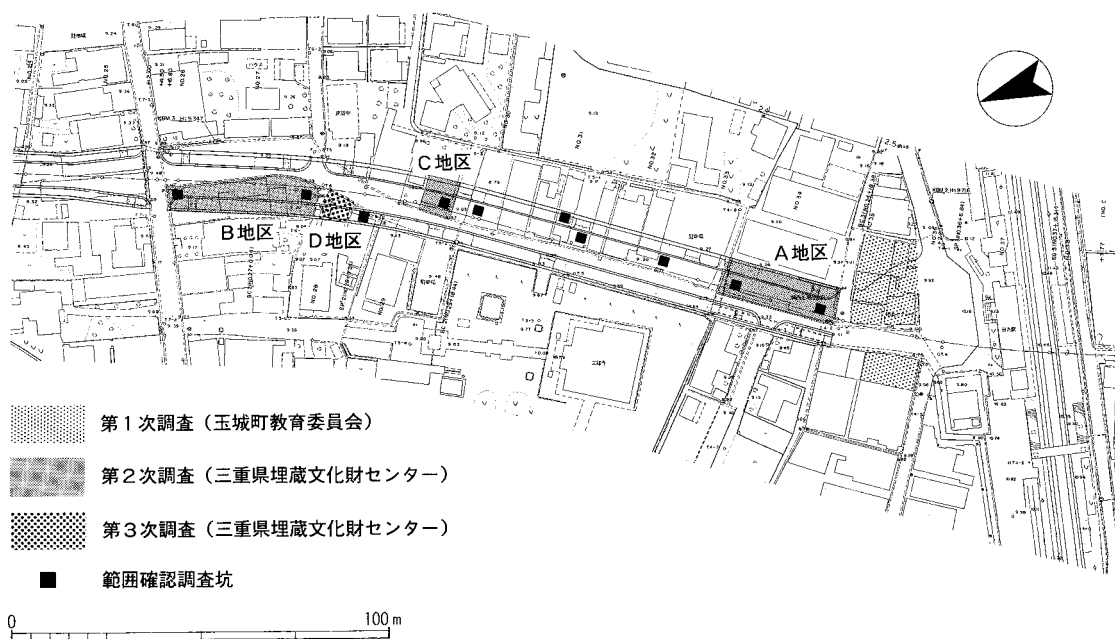
第2次調査

- 11月4日 B地区表土掘削開始。
- 11月7日 B地区表土掘削終了。
- 11月12日 人力掘削開始。
- 11月14日 遺構検出開始。
- 11月19日 SD2・4・5・7・8など、錯綜する状態で溝を検出。木片(柱痕?)を有する土坑・ピットあり。
- 11月21日 SD8底部に礫集中。

- 12月2日 調査区清掃。
- 12月3日 午前：調査区全景及び個別遺構写真撮影。
午後：A地区表土掘削。
- 12月4日 A地区表土掘削。B地区遺構実測。
- 12月5日 A地区表土掘削終了。B地区SD8実測。
- 12月8日 A地区人力掘削開始。
- 12月10日 包含層掘削・遺構検出開始。
- 12月11日 SD1・2、SK3遺構掘削。B地区SD8実測終了。
- 12月17日 SK3は2基の切り合いと判明。
- 12月19日 調査区全景及び個別遺構写真撮影。
- 12月22日 遺構実測。
- 12月24日 遺構実測。
(年末年始で調査一時中断)
- 1月6日 C地区表土掘削。
- 1月7日 人力掘削開始。溝・土坑など検出。
- 1月9日 遺構掘削。遺物僅少。
- 1月14日 調査区全景及び個別遺構写真撮影。
- 1月15日 遺構実測。全工程終了。
- 1月16日 現場詰所撤収。

第3次調査

- 7月15日 立会い調査実施。



第2図 調査区位置図 (1:2,000)

(3)文化財保護法等による諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

- ・三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘通知(県教育長宛県知事通知)
平成15年7月9日付伊建第342号
- ・文化財保護法第58条の2第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)
平成15年10月21日付教埋第187号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(伊勢警察署長宛県教育長通知)
平成16年2月3日付教委第12-9-7号

3 調査の方法

(1)遺構番号について

現地調査の段階では、調査区毎に1から遺構番号を付与した。本遺跡の調査は3次にわたり実施されているため、調査次及び調査区相互に遺構番号の重複がないよう、報告書作成時に遺構番号の整理を行った。玉城町教育委員会が実施した第1次調査では、遺構番号の付与が1桁であったため、今回報告する第2次調査は11から33とした。なお、第3次調査では遺構は検出されなかったため、遺構番号は付与されていない。詳細は第1表の遺構一覧表を参照されたい。

(2)調査区の設定について

第2次調査 調査区は、道路計画路線内に3地区に渡るため、第2図のように南側の駅前からA・B・C地区と設定した。各調査区では、概ね調査区長辺に沿った任意の基準を設定し、4m方眼の地区杭を設置した。従って、この小地区方眼は国土座標と合致していない。地区杭には、北～南に算用数字、西～東にアルファベットを付与し、各地区の北西杭を当該地区名とした。

第3次調査 第2次調査の調査区名を踏襲し、第3次調査の対象地をD地区とした。工事施工時の立会い調査であったため、4m方眼の地区杭の設置は行っていない。

(3)掘削の方法

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

(4)遺構図面の作成について

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図…1:20
- ・遺物出土状況図…1:10
- ・土層断面図…1:20

(5)遺構写真について

調査区全景写真は、ローリングタワーを設置して撮影した。個別の遺物出土状況及び遺構写真は、一部脚立を利用し撮影した。フィルムは、6×7cm版(モノクロ・カラーポジ)に加え、35mm版(モノクロ・カラーポジ)を使用した。カメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンFM2を使用した。

【註】

- ①調査担当者の中西秀貴氏のご教示による。

II 位置と環境

1 位置と地理的環境

佐田南浦遺跡(1)は三重県度会郡玉城町佐田字南浦に所在する。玉城町はやや東偏するが、南北に長い本県のほぼ中央部に位置する。玉城町の地形は、北部の玉城丘陵、南部の国東山地、東部の宮川低地、中央部の外城田川平野の概ね4地形に区分される。当遺跡は中央部の外城田川平野に位置し、玉城丘陵と国東山地から流出する水を集めて当町のほぼ中央部を東流する外城田川左岸の低位段丘面に立地する。

2 歴史的環境

当遺跡が所在する度会郡は、隣接の多気郡と共に7世紀には伊勢神宮の神領となっていた。多気郡から分離され公郡として独立していた飯野郡も、9世紀末には神領に復し、以降この地域は神三郡と称された。多気郡の有爾郷鳥墓には、伊勢神宮の庶務一般を管掌する神寺が置かれ神政が執り行われていた。この神寺は、現明和町蓑村所在の鳥墓神社周辺に比定され、鳥墓遺跡(2)として遺跡登録されている^①。また、天武天皇二年(673年)に大来皇女が卜定されてから制度的に確立されたとされる齋宮も多気郡に置かれ、南北朝期の廃絶まで齋王制度は継続された。

神政が執り行われたとされる有爾鳥墓の神寺推定地には、現在、神宮御料土器調整所が所在し、伊勢神宮へ土器を貢納している。この地域は古代以来、伊勢神宮や齋宮へ土器を貢納していた地域と考えられており、北野遺跡や水池土器製作遺跡など、飛鳥～奈良時代の組織的な土師器生産遺跡も確認されている。平安時代以降、この地域の土師器生産に関する考古学的資料は少ないが、古代以来、中～近世においても伊勢神宮への土器貢納が行われていたことは、文献史学を中心に検証されている^②。また、中世以降は伊勢神宮への「奉仕」的生産から、商品土器の生産へと発展し、いわゆる「南伊勢系土師器」の中心的生産地として土器生産が継続された^③。

鎌倉幕府成立後、神三郡は守護不入の地として確保されたものの、主に武家による侵略・横領が相次

いだ。その結果、伊勢神宮のこの地域における影響力は次第に低下し、平安時代に隆盛を極めた齋宮も、南北朝期には廃絶する。この頃、伊勢国司として北畠氏が伊勢に入部し、以後、この地域は北畠氏の支配下となる。北畠氏の拠点の一つとなった田丸城跡(3)は、伊勢本街道と熊野街道の分岐点にもあたる交通の要衝に立地し、周辺には、池村城跡(4)、有爾中城跡(5)、笠木館跡(6)、山神城跡(7)、岩出城跡(8)なども所在する。田丸城は、延元元(1336)年に北畠親房、顕信父子が築城して以来、南朝方の拠点となり、南北朝合一後も北畠氏の支配下に置かれた。永禄12(1596)年に織田信長の大河内城攻めの際の和議によって北畠氏の養子となった次男茶羹丸が後に信雄と改名、城主となり、以後、堀・石垣・土塁を備えた近世的平山城として生まれ変わる。江戸時代には、和歌山藩家老の久野家が城代となり、八代続いて明治の廃城を迎える。

平安時代から中世にかけて、この地域の領主層を支えた集落跡も、いくつか確認されている。野垣内遺跡(9)では、平安時代の掘立柱建物5棟の他、同時期の竪穴住居も確認されており^④、当時の一般庶民の生活の一端を見ることができる。上の山遺跡(10)では、平安時代中期の総柱建物を含む掘立柱建物2棟が確認されている^⑤。西村遺跡(11)・愛場遺跡(12)・波瀬B遺跡(13)では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や井戸・土坑・溝などが確認されている^⑥。さらに楠ノ木遺跡(14)や岩出遺跡群(15)では、平安時代末期～室町時代の大規模な集落が形成され、岩出遺跡群蚊山地区では江戸時代に瓦窯も営まれている^⑦。

以上のように、古代以降のこの地域の歴史的環境を概観したが、本遺跡周辺には今なお往時を偲ばせる佇まいが随所に残されている。

【註】

①『明和町遺跡地図』(明和町 1988年)

②明和町の本郷遺跡では、平安時代～中世前期の土器焼成遺構が4基確認されている。(伊藤裕偉『本郷遺跡(第2次)・曲里中遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1992年))

③小林 秀「中世後期における土器工人集団の一形態—伊勢国

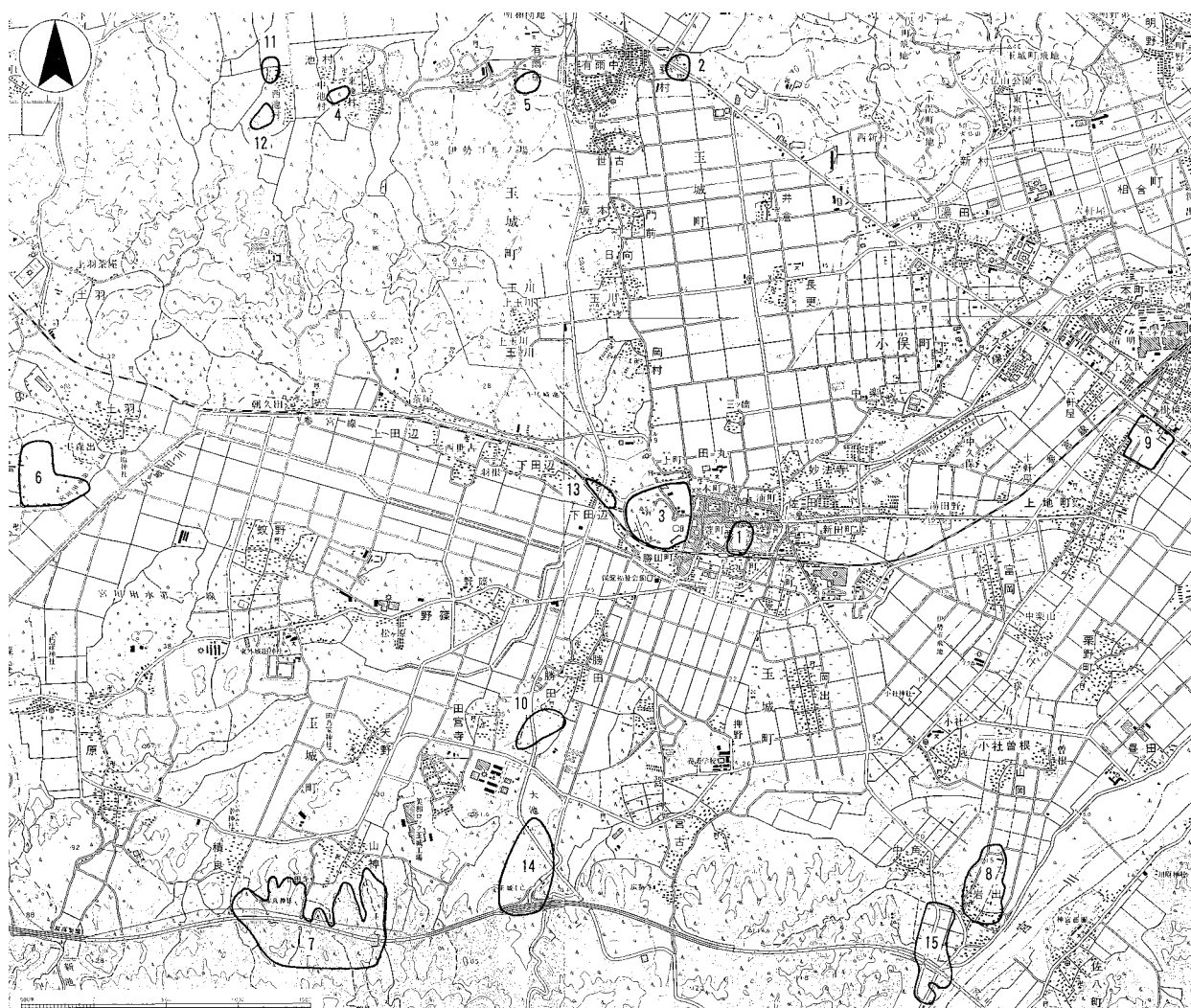
有尔郷を素材として」(『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年)

- ④・伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- ・小林 秀「外山遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第一分冊—』 三重県埋蔵文化財センター 1990年)
- ⑤下村登良男「伊勢市上地町野垣内遺跡」(『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1979年)
- ⑥上村安生『上の山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- ⑦・高見宜男「VI 多気郡明和町西村遺跡・愛場遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年)
- ・上村安生『波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)

- ⑧・伊藤裕偉ほか『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告—第3分冊—桶ノ木遺跡』(三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)
- ・前川嘉宏ほか『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告—第6分冊—蚊山遺跡左郡地区』(三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1993年)
- ・伊藤裕偉ほか『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)

【参考文献】

- ・『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ・『日本歴史地名大系第24巻 三重県の地名』(平凡社 1983年)
- ・『定本 三重県の城』(郷土出版社 1991年)
- ・『三重の中世城館』(三重県良書出版 1977年)



第3図 遺跡位置図 (1 : 50,000) 「この地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図(松阪)(明野)(国束山)(伊勢)を複製したものである。(承認番号平17部複、第149号)」

Ⅲ 第2次調査

1 遺 構

(1)A地区

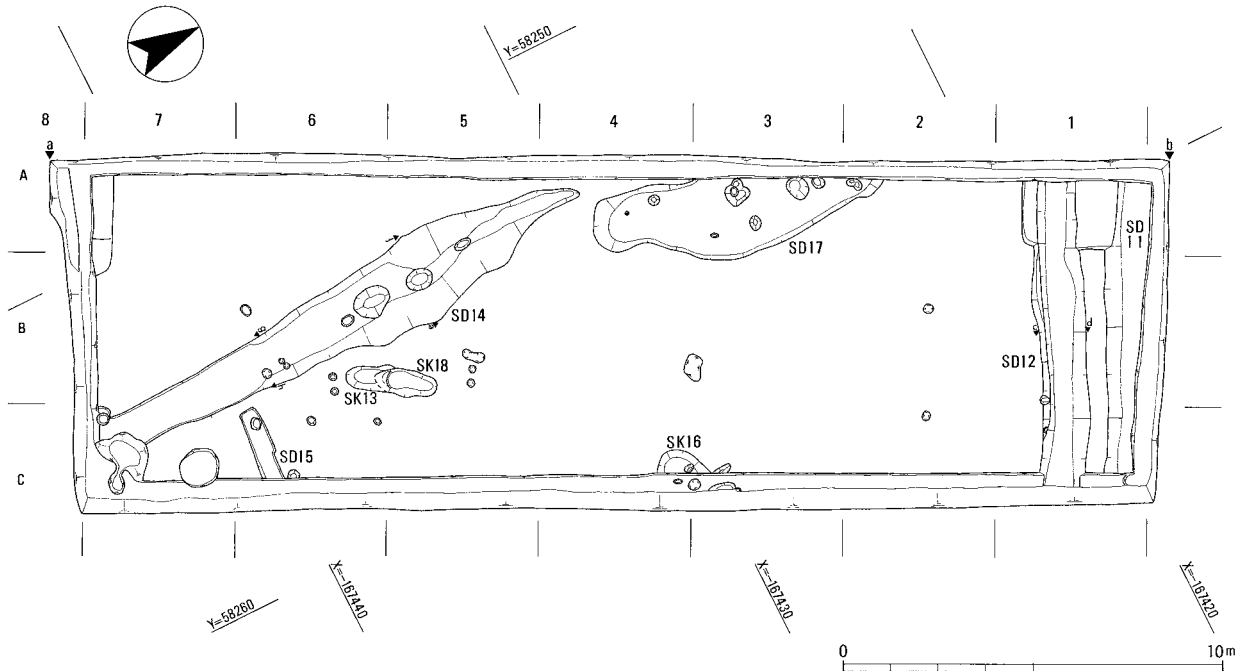
①基本層序と検出遺構

A地区の基本層序は、第Ⅰ層：整地土、第Ⅱ層：暗灰色粘土、第Ⅲ層：黒褐色粘土、第Ⅳ層：黄褐色粘質土で、第Ⅱ層が旧耕作土、第Ⅳ層が地山である。遺構は第Ⅳ層上面で検出した。検出した遺構は溝・土坑・ピットであるが、遺構密度は希薄である。出

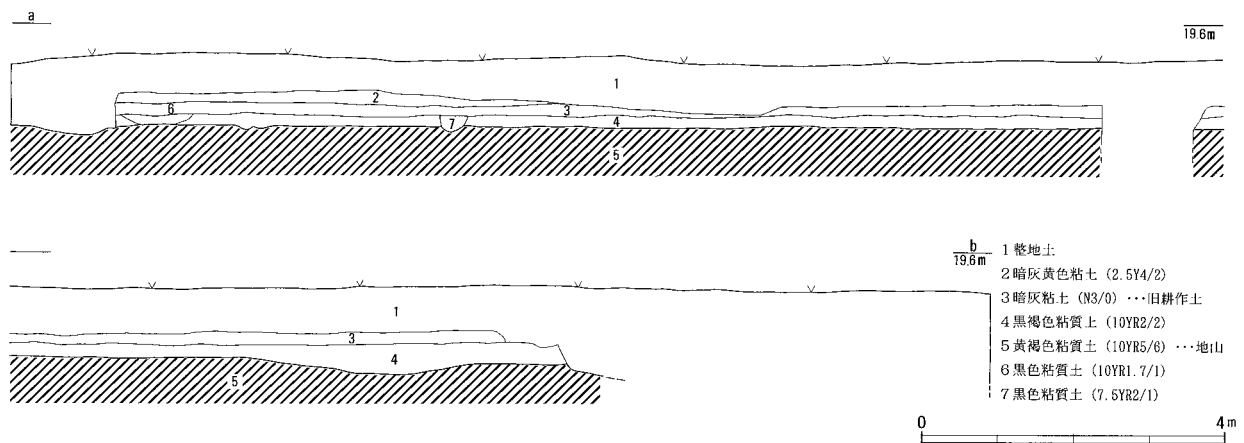
土遺物は整理箱1箱にも満たず、遺構内出土遺物も少量であるため、時期不明の遺構が多い。

②平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構

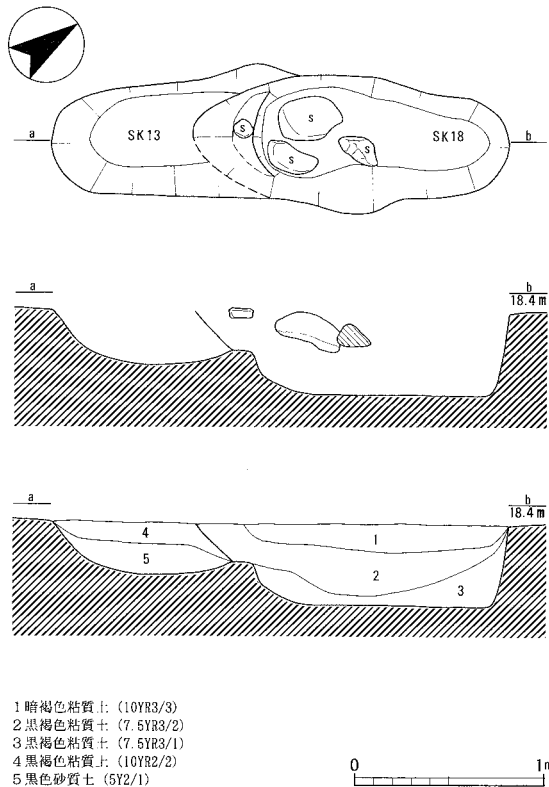
SD12 調査区の北端に位置し、SD11に平行する。東西方向に築かれた溝であるが、両端部が調査区外に延長するため全長は不明である。検出範囲内の幅は約1.2m、深さは0.6mで、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘土一層で、短期間に埋没したと推定される。埋土中から須恵器・ロクロ土師器の



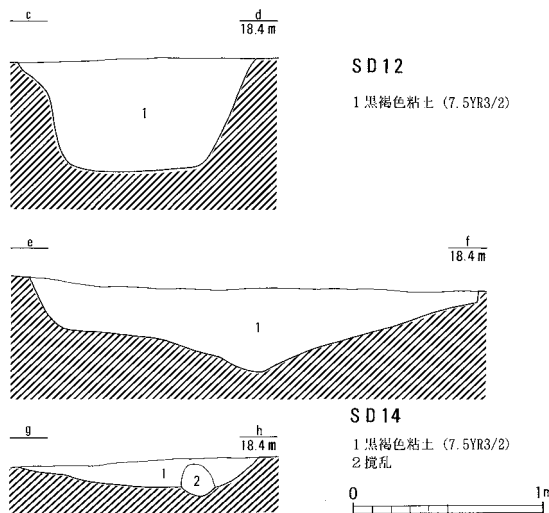
第4図 A地区遺構平面図 (1:200)



第5図 A地区土層断面図 (1:100)



第6図 SK13・SK18実測図・埋土断面図(1:40)



第7図 SD12・SD14埋土断面図(1:40)

他、12世紀末～13世紀初頭の土師器皿(1)・山茶碗(3)が出土している。

SK13 調査区南半部に位置する土坑である。SK18に切られるため全容は不明であるが、長軸2m程の平面楕円形を呈する土坑と推定される。検出当初はSK18との切り合い関係に気づかず、一連の長楕円形の土坑と認識していたが、埋土の観察と底部の形状から2遺構の重複と判断した。出土遺物は僅少で、土師器鍋片(4)以外は土師器の細片が出土したにすぎない。

③室町時代の遺構

SD11 調査区の北端に位置する。東西方向に築かれた溝であるが、南側の肩部のみの検出のため、全長・全幅・深さなど、全体の規模は不明である。須恵器・土師器・ロクロ土師器が出土しているが、15世紀代の土師器皿(2)が出土していることから、室町期の遺構と判断した。

④時期不明の遺構

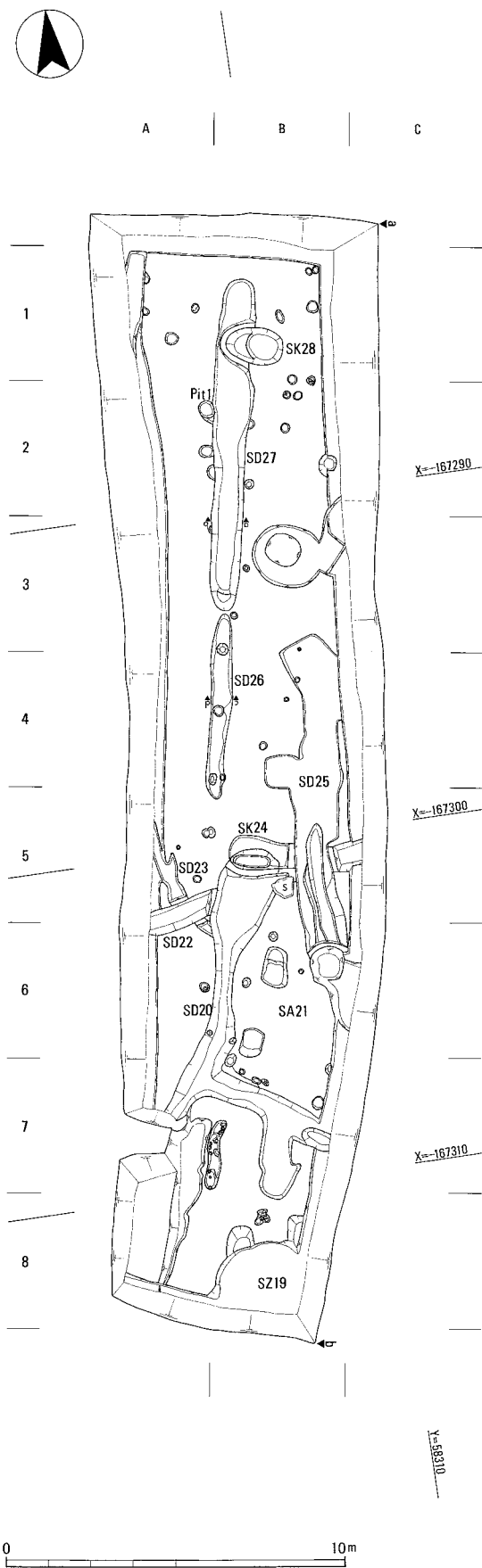
SK18 SK13と重複する長軸約1.6mの平面楕円形を呈した土坑で、遺構上面に径10～30cm程度の礫が認められた。深さは0.4m程で、埋土は三層から成る。出土遺物は皆無であるが、SK13との関係から、平安末～鎌倉初頭以降の時期と判断される。礫が据え置かれたような状況や遺構の形態から中世墓も想定されるが、遺構の性格は判然としない。

SD14 調査区の南半部に位置し、ほぼ南北に延びる溝である。検出面からの深さは数cm～40cm程度で、溝北半部が深くなり、底部にピット状の窪みが存在する。埋土は黒褐色粘土一層である。出土遺物は土師器の細片が2片出土したのみで所属時期は不明である。不規則な形状から人工的な遺構とは考えにくく、自然流路の可能性が高い。

SD17 SD14の北側に位置する。埋土は黒褐色粘土一層で、底部にピット状の窪みが存在する。出土遺物は皆無で所属時期は不明である。検出時は分離していたが、SD14と同一遺構と考えられる。

SD15 東端部が調査区外に延長するため全長は不明であるが、幅約0.6m、検出面からの深さが数cmの小規模な溝である。遺物は全く出土していない。

SK16 調査区外に延長するため全体の規模・形状は不明である。遺物は全く出土していない。



第8図 B地区遺構平面図 (1:200)

(2)B地区

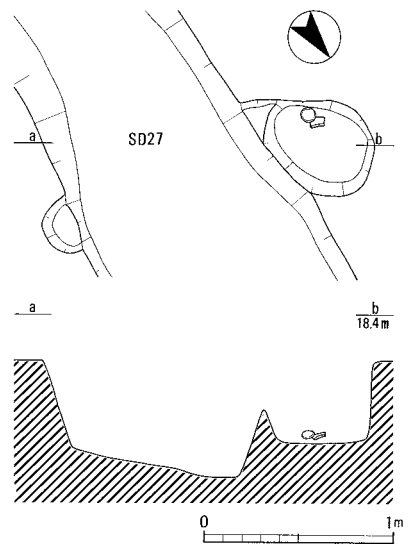
①基本層序と検出遺構

B地区の基本層序は、第Ⅰ層：整地土、第Ⅱ層：黒褐色粘質土、第Ⅲ層：明黄褐色粘土で、第Ⅱ層が遺物包含層、第Ⅲ層が地山である。遺構は第Ⅲ層上面で検出した。遺構密度は比較的高く、今回調査での出土遺物の大半は当調査区出土のものである。検出した遺構は溝・土坑・落ち込み・柱列で、調査区南半部では複数の遺構が重複している。これらの新旧関係は、検出時の切り合いと、出土遺物から判断した結果、古い方からSD20・SD23→SD22・SK24→SD25となる。遺構の時期は、平安時代末期～鎌倉時代と室町時代の概ね二時期に大別される。

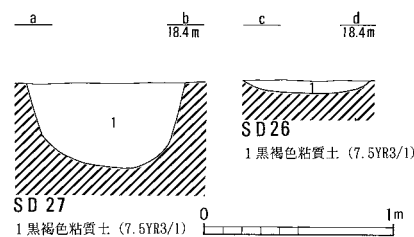
②平安時代末期～鎌倉時代の遺構

B2-Pit 1 調査区の北側に位置し、SD27に切られている。遺構底部より、土師器皿(5)・甕(6)が出土した。

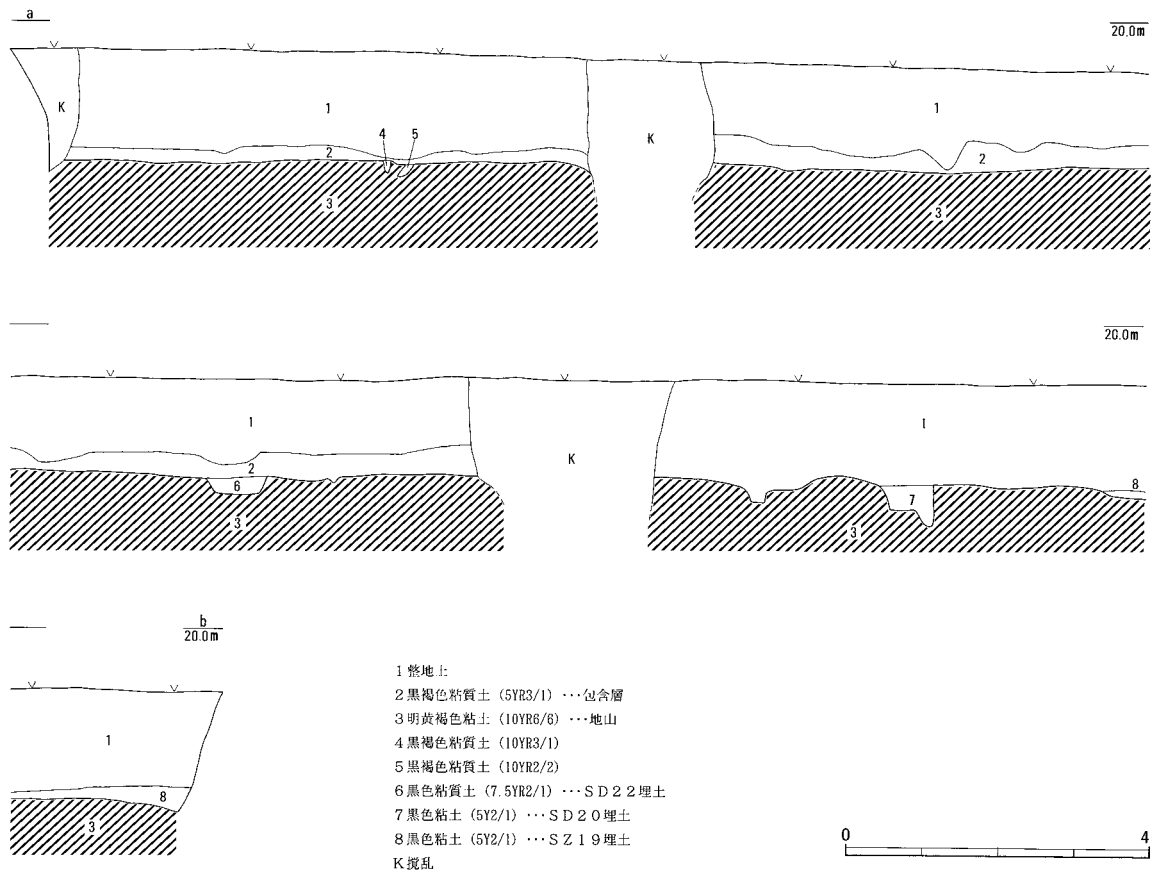
SD27 調査区北半部中央付近に位置し、南北に延びる溝である。全長約10m、幅1m内外、検出面



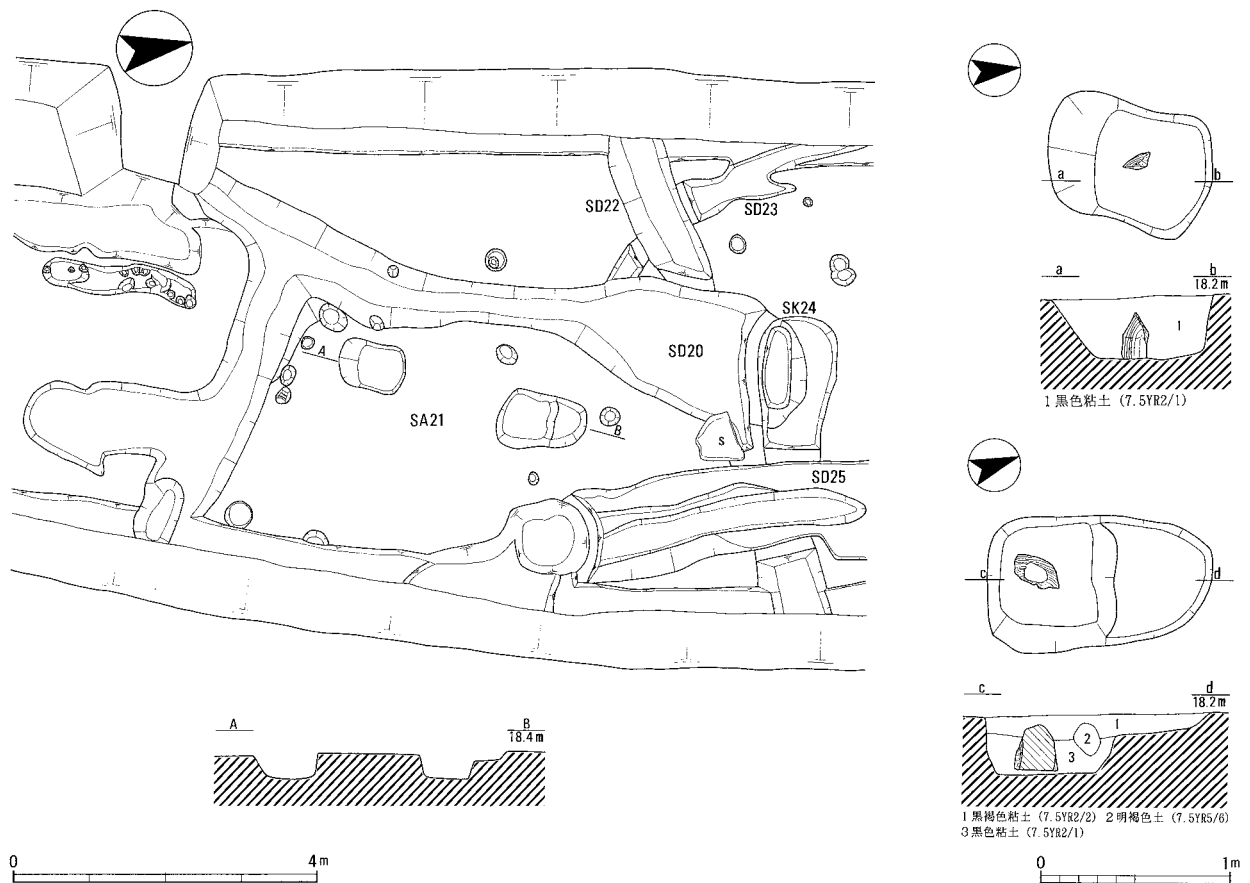
第9図 B2-Pit 1 遺物出土状況図 (1:40)



第10図 SD27・SD26埋土断面図 (1:40)



第11图 B地区土层断面图 (1:100)



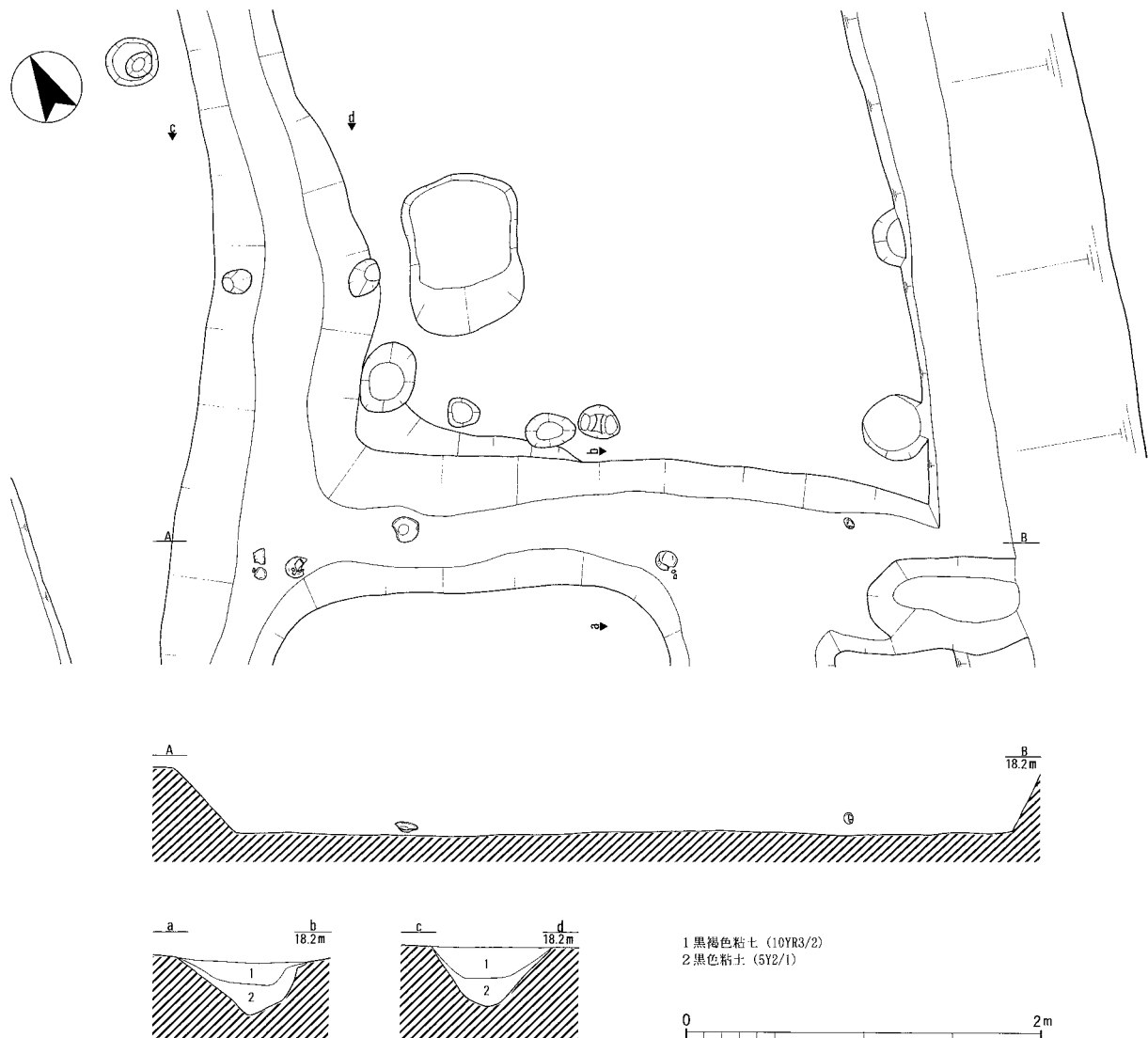
第12图 SA21实测图 (1:100) · 柱痕出土状况图 (1:40)

からの深さ約0.4mの規模を持ち、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土の一層で、短期間に埋没したと推定される。出土遺物はごく僅かであるが、土師器皿(8)・甕などが出土している。また、混入遺物として、弥生土器の壺(7)も出土した。

SA21 調査区南半部で検出した柱列である。いずれの柱穴からも柱部材が出土している。柱掘形は一辺が0.6~0.8m程の隅丸方形もしくは隅丸長方形で、柱間は2.0mを測る。これら以外に、想定される位置で柱穴の検出を試みたが、検出することはできなかった。明確な掘形を持ち、柱痕も残存するため、建物跡を想定したいところであるが、ここでは単に柱列として報告しておく。出土土器はいずれも小片のため図化できなかったが、山茶碗や12世紀末~13世紀初頭頃と見られる土師器鍋が出土しているため、

平安末~鎌倉期の遺構と判断した。

SD20 調査区の南半部に位置する不定形の溝である。一部が調査区外へ延長するため全体の規模や形態は不明である。北端部は幅広となり、南端部付近では南東方向に溝が分岐し、分岐部分はさらに南へ小さく分岐している。検出面からの深さは0.3~0.4mで埋土は黒褐色粘土と黒色粘土の二層である。今回調査で検出したすべての遺構の中で最も多くの遺物が出土し、完形品や墨書土器も出土している。13~14世紀代の遺物(9~30)がある程度まとまって出土し、それに15~16世紀代の遺物が若干加わる状況から、13~14世紀代に区画溝的なものとして構築された溝が長期間遺存し、15~16世紀の段階で完全に埋没したと判断される。



第13図 SD20遺物出土状況図・埋土断面図 (1 : 40)

③室町時代の遺構

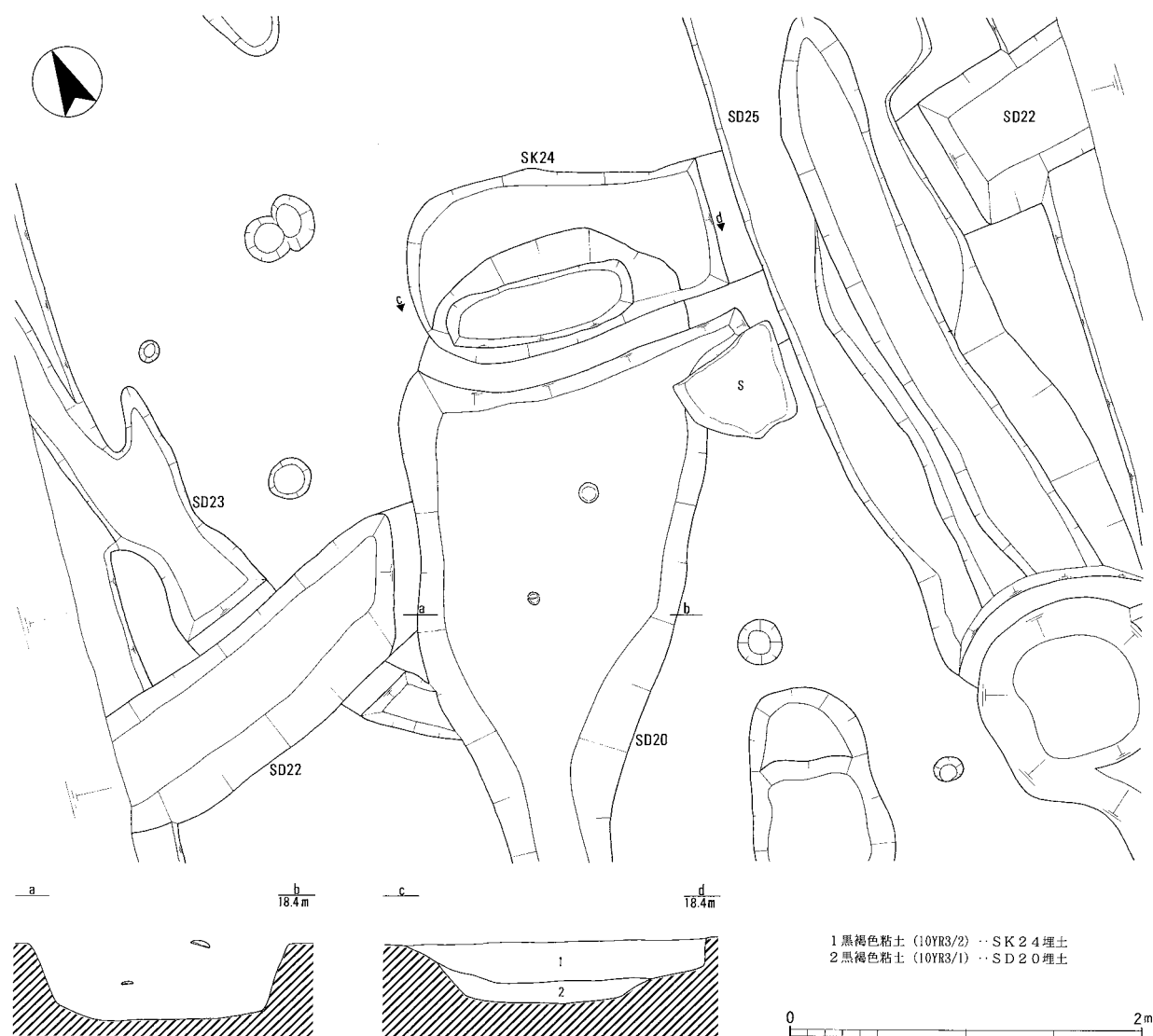
SZ19 調査区の南端に位置する。調査区外に延長するため全体の規模は不明であるが、径2m程度の円形土坑になる可能性がある。土師器皿(31・32)・鍋(33)・茶釜(34)、常滑産の甕(35)などが出土した。

SD22 調査区の中央付近を南北方向に延びる溝である。両端が調査区外に延長するため全長は不明であるが、幅約0.8m、検出面からの深さ約0.2~0.3mを測る規模を持つ。土師器碗(36)・鍋(37)などが出土した。

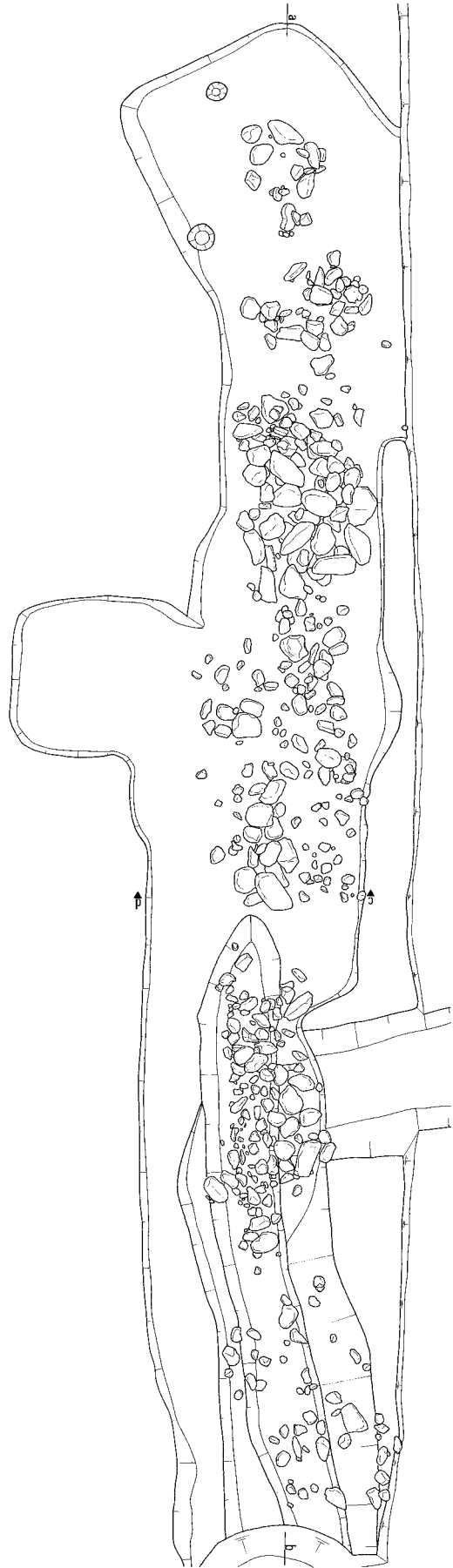
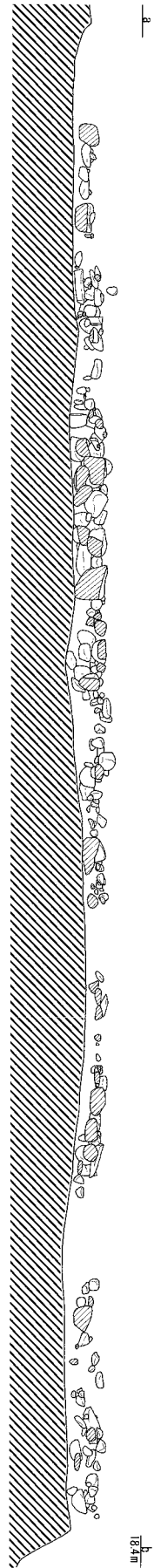
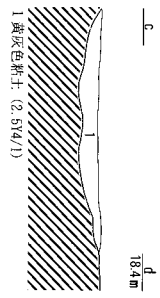
SK28 調査区北端部に位置し、SD27を切っている。長軸約1.8mの楕円形の土坑で、底部は有段となっている。土師器皿(38・39)・鍋(40)、瀬戸産の陶器縁釉小皿(41)が出土した。

SK24 調査区中央付近に位置する。東端部がSD25に切られているため、平面形態は定かではないが、長軸2m程度の楕円形を呈する土坑と推定される。埋土は黒褐色粘土の一層で短期間に埋没したことが推定される。土師器皿(42)・鍋(43)などが出土した。

SD25 調査区中央部の東壁よりに位置し、南北方向に延びる不定形の溝である。南端部を攪乱坑に切られているが、全長は概ね10m程度と推定される。若干深くなる部分もあるが、概ね検出面より0.1~0.2m程度の浅い溝である。埋土は黄灰色粘土一層で、溝底部には部分的に疎密があるものの、拳大程度の礫が投棄されたような状態で検出された。15~16世紀代の遺物が埋土中から出土している。



第14図 SD20遺物出土状況図・SK24埋土断面図 (1:40)



第15图 SD25磔出土状况图・埋土断面图 (1 : 40)

④時期不明の遺構

SD 26 出土遺物が土師器の細片のみのため、時期判断の材料に欠けるが、SD 27との位置関係や類似した埋土であることから、同時期の遺構の可能性はある。

SD 23 出土遺物が皆無のため時期は不明であるが、SD 22に切られていることから、室町時代以前であることは認められる。

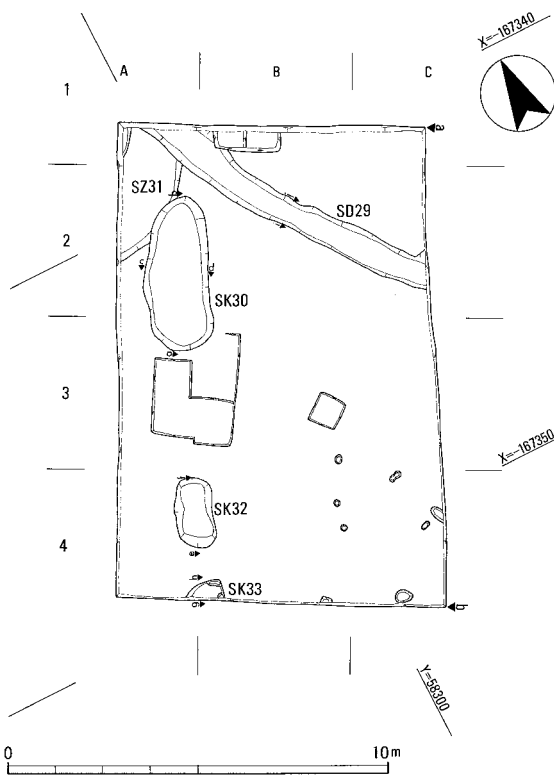
(3)C地区

①基本層序と検出遺構

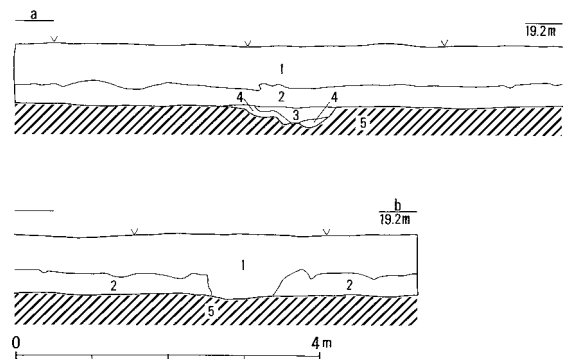
C地区の基本層序は、第I層：整地土、第II層：黒褐色粘質土、第III層：黄色粘土で、第II層は旧耕作土、第III層が地山である。遺構は第III層上面で検出した。検出した遺構は溝・土坑・落ち込み・ピットであるが、遺構密度は希薄である。出土遺物は整理箱1箱にも満たず、遺構内出土遺物も少量であるため、時期不明の遺構が多い。

②室町時代の遺構

SD 29 調査区の北東隅に位置する。両端部が調

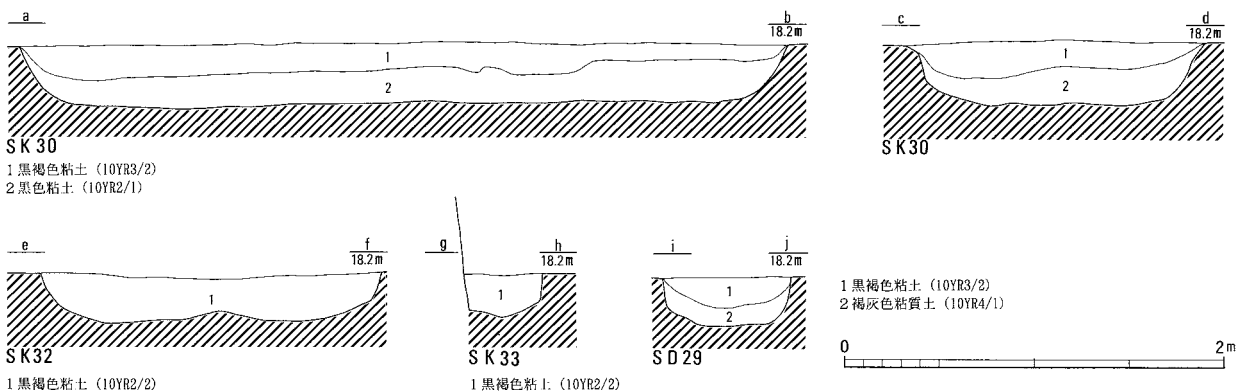


第16図 C地区遺構平面図 (1:200)



- 1 整地土
- 2 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) …旧耕作土
- 3 黒褐色粘土 (10YR3/2) …SD 29埋土
- 4 褐色粘質土 (10YR4/1) …SD 29埋土
- 5 黄色粘土 (2.5Y7/8) …地山

第17図 C地区土層断面図 (1:100)



第18図 SK 30・SK 32・SK 33・SD 29埋土断面図 (1:40)

査区外に延長するため全長は不明であるが、幅約0.8m、深さ約0.2m程度の規模を持ち、断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色粘土と褐灰色粘質土の二層で、埋土中より土師器、山茶碗、陶器などが少量出土した。出土遺物はいずれも小片で、時期判断の材料に乏しいが、15世紀頃のものともみられる土師器皿が出土しているため、所属期は室町時代と判断した。

SK30 長軸約4m、短軸約1.8m、深さ約0.3mを測る平面楕円形の比較的規模の大きい土坑である。埋土は黒褐色粘土と黒色粘土の二層で、埋土中から須恵器、山茶碗、青磁碗、陶器挿鉢、土師器皿・鍋・茶釜(88)などが出土したが、いずれも小片で、遺構の埋没時に混入したものと考えられる。遺構の規模に比して出土遺物は少量で、その他の判断材料にも乏しいため、遺構の性格は不明である。

③時期不明の遺構

SK32 調査区南半部に位置する。長軸約1.8m、

短軸約1mの平面楕円形を呈する土坑である。深さは0.2m程度で埋土は黒褐色粘土の一層である。出土遺物は土師器の小片1点のみで、時期は不明である。当調査区内では古代に遡る遺物も若干出土しているが、埋土の状況などから、室町期の遺構の可能性はある。

SK33 調査区南端部に位置し、一部が調査区外に延長する。埋土は黒褐色粘土の一層で、出土遺物は皆無であった。全体の規模・形態は不明であるが、埋土の状況やSK32の長軸の延長線上に配置される位置関係からSK32と同規模・同形態の土坑と推定される。時期は不明であるが、本遺構も室町期のものである可能性がある。

SZ31 調査区北西隅に位置する落ち込みである。出土遺物は皆無で時期は不明であるが、SD29・SK30に切られているため、室町時代以前であることは認められる。

遺構番号	調査時遺構番号	地区	グリッド	性格	時期	備考
SD11	SD1	A	A1~C1	溝	室町	
SD12	SD2	A	A1~C1	溝	平安末~鎌倉初頭	
SK13	SK3	A	B6	土坑	平安末~鎌倉初頭	
SD14	SD4	A	A4~C7	溝	不明	土師器細片のみ出土
SD15	SD5	A	C6	溝	不明	出土遺物なし
SK16	SK6	A	C3・4	土坑	不明	出土遺物なし
SD17	SD7	A	A2~4	溝	不明	出土遺物なし
SK18	SK8	A	B5	土坑	不明	SK13を切る
SZ19	SZ1	B	A8・B8	落ち込み	室町	
SD20	SD2	B	B5~A8	溝	鎌倉	
SA21	SK3	B	B6	柱列	平安末~鎌倉	柱痕遺存
	Pit1	B	B6		平安末~鎌倉	柱痕遺存
SD22	SD4	B	A5~6	溝	室町	SD23を切る
	SD7	B	B5		室町	
SD23	SD5	B	A5~B6	溝	不明	出土遺物なし
SK24	SK6	B	B5	土坑	室町	SD20を切る
SD25	SD8	B	B3~6	溝	室町	SD22・SK24を切る
SD26	SD9	B	B3~5	溝	不明	土師器細片のみ出土
SD27	SD10	B	B1~3	溝	平安末~鎌倉	
SK28	SK11	B	B1	土坑	室町	SD27を切る
SD29	SD1	C	A1~C2	溝	室町	SZ32を切る
SK30	SK2	C	A2~B3	土坑	室町	SZ32を切る
SZ31	SZ3	C	A1・2	落ち込み	不明	出土遺物なし
SK32	SK4	C	A4・B4	土坑	不明	土師器小片のみ出土
SK33	SK5	C	B4	土坑	不明	出土遺物なし

第1表 遺構一覧表

2 遺物

(1)出土遺物の概要

今回の調査では、古代～近世の須恵器・土師器・ロクロ土師器・陶磁器など整理箱で24箱分の遺物が出土した。A地区・C地区がそれぞれ整理箱1箱分で、残りはすべてB地区出土の遺物である。出土遺物の概要を以下に記述するが、B地区は遺構別とし、A地区・C地区は少数のため一括して記述する。なお、各遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

(2)A地区の出土遺物

1は器高1cm余りの扁平な土師器皿である。斎宮編年のⅢ期第3段階^①に相当し、平安末期に所属する。2は南伊勢系の土師器皿である。器壁は非常に薄く、底部はやや上げ底となる。内面には煤の付着が認められる。伊藤裕偉氏による編年^②(以下、伊藤編年と略表記)の土師器皿B系統Ⅲb期に相当し、15世紀代に所属する遺物である。

3は渥美産の山茶碗である。内面は使用による磨耗のためか、平滑である。藤澤良祐氏の山茶碗編年^③(以下、藤澤編年と略表記)の第5型式に相当し、12世紀末から13世紀初頭に位置付けられる。

4は南伊勢系の土師器鍋である。口縁部は外反し、口縁端部は折り返されるが、折り返し部分へのヨコナデはあまり強くない。口縁部のみの残存のため、頸部以下の様相は不明であるが、伊藤裕偉氏による編年^④(以下、伊藤編年と略表記)の第1段階a型式に相当すると思われる、12世紀末から13世紀初頭頃の遺物と推定される。

(3)B地区の出土遺物

①B2-Pit1出土遺物

5は土師器皿である。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。器壁は厚めで、口縁端部をヨコナデする。斎宮編年のⅢ期第2段階に相当する。

6は土師器甕である。頸部から口縁部は若干肥厚し、口縁端部上端面はヨコナデにより平坦な面を有する。体部はユビオサエ・ナデのみの調整で仕上げられる。平安時代の後半期に所属する遺物であろう。

②SD27出土遺物

7は受口状口縁の弥生時代中期後葉の壺である。

橙色を呈し、胎土はやや粗い。器面の劣化により調整は不明瞭であるが、頸部は密な縦位のハケメ調整が施される。

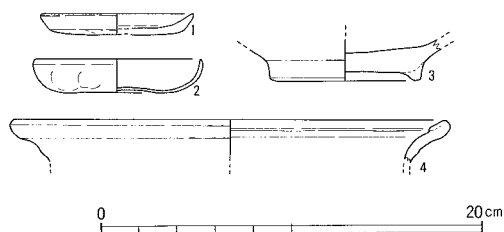
8は土師器皿である。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。器壁は厚めで、口縁端部をヨコナデする。斎宮編年のⅢ期第2段階に相当する。

③SD20出土遺物

9～12は土師器小皿である。10以外は器形が歪んでおり、11が特に著しい。12は素地粘土の接合痕跡が明瞭に残されている。

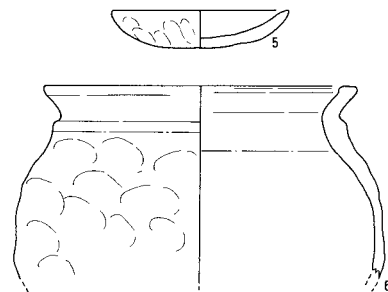
13～16は土師器皿である。いずれも伊藤編年のB系統Ⅱb期に相当し、13世紀末～14世紀に属する遺物である。16は内面に記号状の墨書が記されている。17～19は、南伊勢系の土師器鍋である。これらはいずれも伊藤編年の第2段階に相当し、13世紀後葉から14世紀前葉の時期があてられる。17はc型式の鍋で、口径38cmの大形品である。内面には密なハケメ調整が施される。18は口径20cmの小形品で、内面にハケメ調整が施される。19はb型式の鍋で、口径30cmの中形品である。外面にハケメ調整が施される。

20～27は山茶碗である。藤澤編年の第5～第8型式に収まるものと思われる。所属時期は、概ね13世

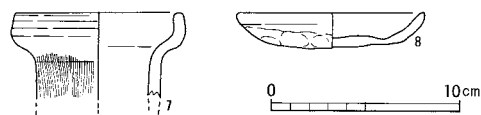


第19図 A地区出土遺物実測図(1:4)

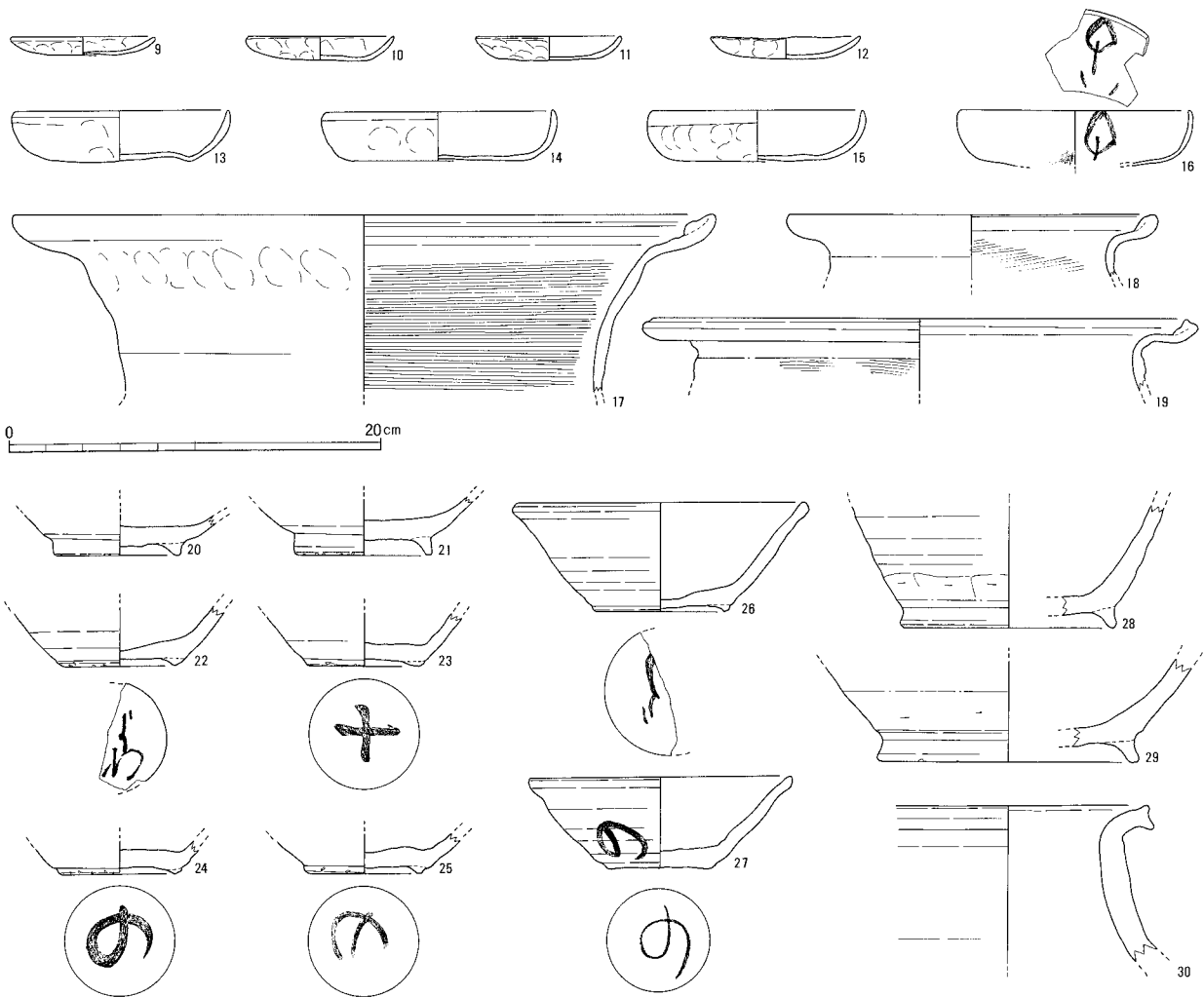
B2-Pit1



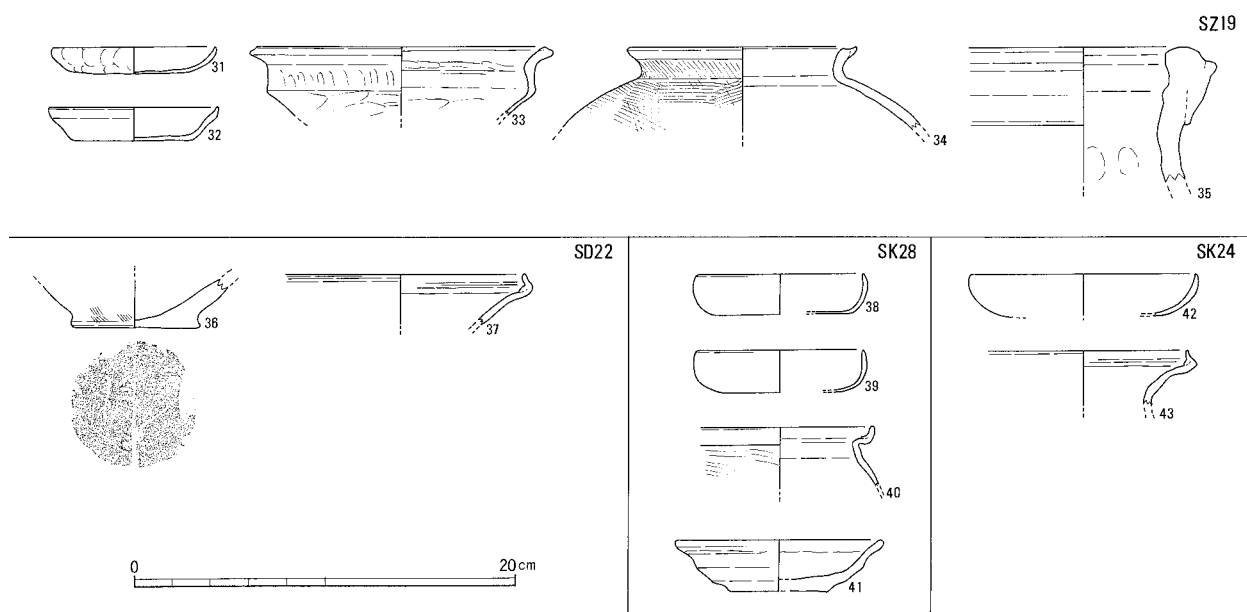
SD27



第20図 B地区B2-Pit1・SD27出土遺物実測図(1:4)



第21図 B地区SD20出土遺物実測図 (1 : 4)



第22図 B地区SZ19・SD22・SK28・SK24出土遺物実測図 (1 : 4)

紀代であろう。なお、22~27には墨書が施され、22は「よね」、23は「十」、24・25は「の」、26は判読し難いが「□た」の文字が底部外面に記される。27は体部外面と底部外面に「の」と記されている。

28・29は無釉陶器の練鉢である。28は29に比して高台径は小さく、体部の立ち上がりも急である。

30は常滑産の甕である。口縁端部が短く外折し、外面に面を有する。中野晴久氏の分類^⑤(以下、中野分類と略表記)による5型式に相当し、13世紀前半代に所属する遺物と考えられる。

④SZ19出土遺物

31・32は南伊勢系の土師器小皿である。31はB系統、32はD系統^⑥の皿で、ともに16世紀代の遺物と考えられる。

33は口径16cmの小形の土師器鍋である。内外面と

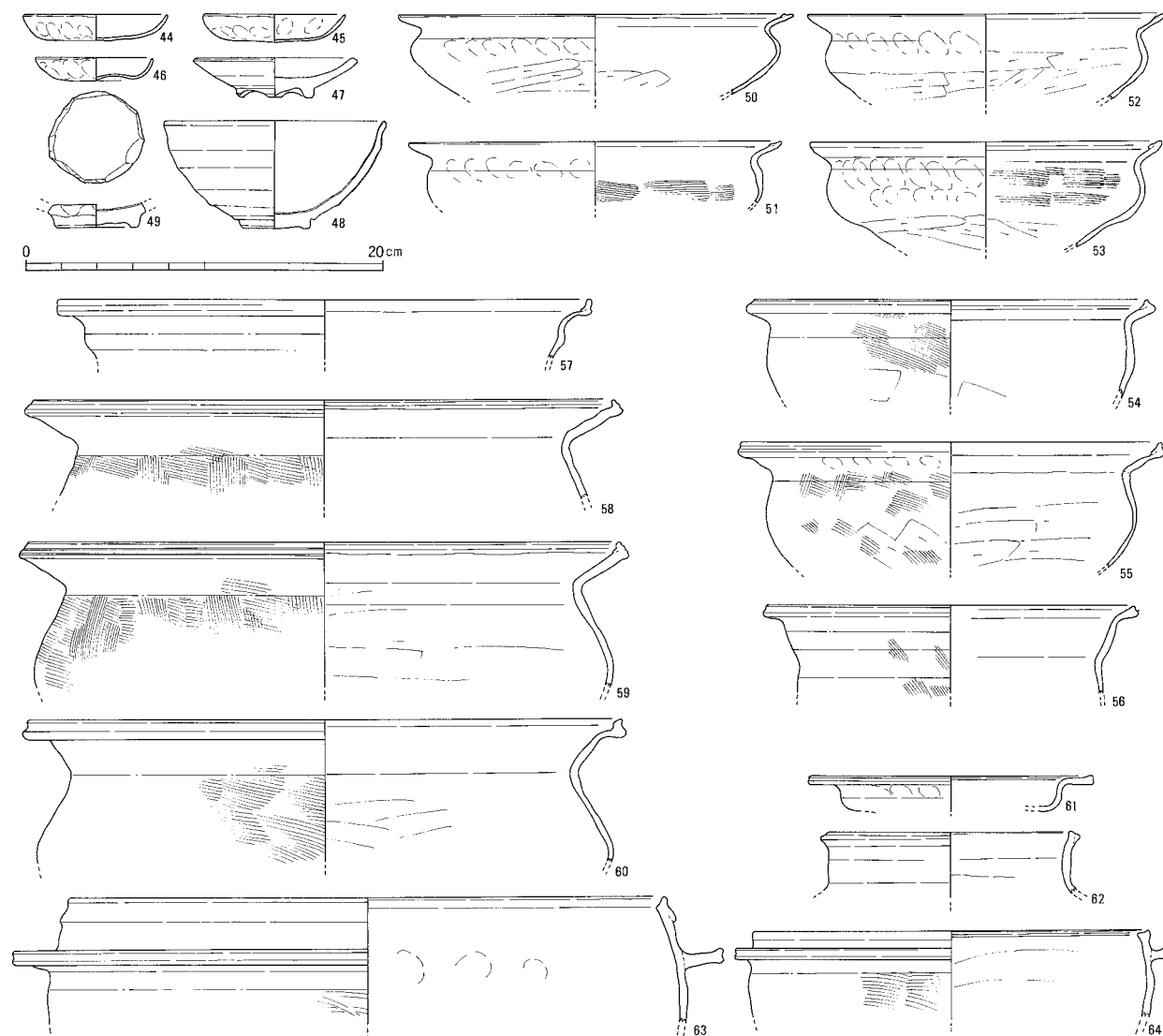
もに体部下半がケズリ、上半がヘラ状工具による調整が施されている。外形ラインが直線的で、角張った器形を呈する。器高は不明であるが、底の浅い扁平な鍋である。口縁部はやや肥厚し、端部の折り返しは痕跡程度である。伊藤編年の第4段階に併行し、15世紀後半から16世紀代の遺物と考えられる。

34は土師器茶釜である。口縁部はやや外傾し、端部が外に折り返される。内面はタール状の煤が付着し、著しく黒変している。

35は常滑産の甕である。口縁端部が外側に折り返され、端部が肥厚する。中野分類の10型式に相当し、15世紀後半代の遺物と考えられる。

⑤SD22出土遺物

36は土師器の椀である。浅黄橙色を呈し、外面はハケメ、内面には工具によるナデ調整が施される。



第23図 B地区SD25出土遺物実測図(1:4)

底部には成形時に回転台として使用したとみられる葉の圧痕が残る。15世紀代の遺物である。

37は伊藤編年の第4段階に相当する土師器鍋である。

⑥SK28出土遺物

38・39はB系統の土師器小皿である。Ⅲb期に相当し、15世紀代の時期が当てられる。

40は口径不明であるが、小形の土師器鍋である。伊藤編年第4段階に並行する。

41は瀬戸産の陶器縁釉小皿である。口径11cm、器高3cm弱で、やや外反した口縁端部内外面に鉄釉が施釉される。底部内面周辺は露胎である。古瀬戸後期に特有の器種で、15世紀代の遺物と考えられる。

⑦SK24出土遺物

42はB系統の土師器皿である。Ⅱb期に相当し、14世紀代に属する。

43は土師器鍋である。短く折り返された口縁端部に強いヨコナデが施され、端部が突出する。伊藤編年第4段階に相当する。

⑧SD25出土遺物

44～46は口径7cm弱から8cmの土師器小皿である。15世紀末～16世紀代の遺物と考えられる。

47は器高2cm余りの扁平な白磁小皿である。高台は波状の丁寧な削り出しで、接地面が4ヶ所にある。内面には重ね焼き痕跡が残される。釉層は薄い。

48は瀬戸大窯期の天目茶碗である。体部の下方はやや丸みを帯び、口唇部はやや直立し、端部が外折する。高台は、高台内の削り込みの浅い輪高台である。藤澤良祐氏の瀬戸大窯編年の概ね第2型式に比定でき、16世紀初頭に位置付けられる。

49は加工円盤である。瀬戸産の陶器平碗の高台部を転用したのと考えられる。

50～60は南伊勢系土師器鍋である。50～53は口径20～22cm程度の小形の鍋で、器高も低く扁平な形態をとる。口縁端部の折り返しは弱く、形骸化している。54・55は口径23～24cmの中形の鍋である。口縁端部の折り返しの幅は狭く、断面三角形状を呈する。56は半球形体部を持つ鍋である。57～60は口径30～34cm程度の大形の鍋で、59・60は外面ハケメ、内面工具ナデの調整が施される。折り返された口縁端部は摘み上げられるような強いヨコナデを受け、内外

面ともに稜を形成している。これらの鍋は概ね伊藤編年の第4段階c型式の範疇に収まると考えられる。

61は土師器茶釜の蓋である。外面に煤が付着している。

62は土師器茶釜である。口縁部はほぼ直立し、端部は外側に折り返される。

63・64は土師器羽釜である。63は口径33cmを超える大形の羽釜である。口縁部は長く内傾し、端部は外側に折り返される。上端面がヨコナデにより面を有し、上方に突出する。伊藤裕偉氏の分類^⑧(以下、伊藤分類と略表記)のDc2類に相当する。64は口縁部・鏝部ともに短く、口縁端部は折り返されず方頭状に収められる。伊藤分類のB類に相当する。

⑨包含層等出土遺物

65～67は口径14～15cm、器高3cm程度の土師器皿である。口縁部は外傾し、ヨコナデが器高の1/2～1/3に施される。斎宮Ⅲ期第3段階に並行し、平安時代の末期に位置付けられる。

68～72は土師器小皿である。68～70は口径9～10cm、器高2cm内外で、口縁部は緩やかに内湾し、端部をヨコナデする。斎宮Ⅲ期第3段階に並行し、平安時代末期に位置付けられる。

71は口径7cm余りの土師器小皿である。16世紀代の遺物であろう。

72は近世の土師器灯明皿である。口縁端部に油煙が付着している。

73はロクロ土師器小皿である。にぶい黄橙色を呈し、径4cm弱の柱状の擬高台が付加される。11～12世紀代の遺物と考えられる。

74・75は山茶碗である。75の底部内面は使用による磨耗のためか、平滑である。いずれも藤澤編年の第5型式に相当し、12世紀末～13世紀初頭の時期が当てられる。

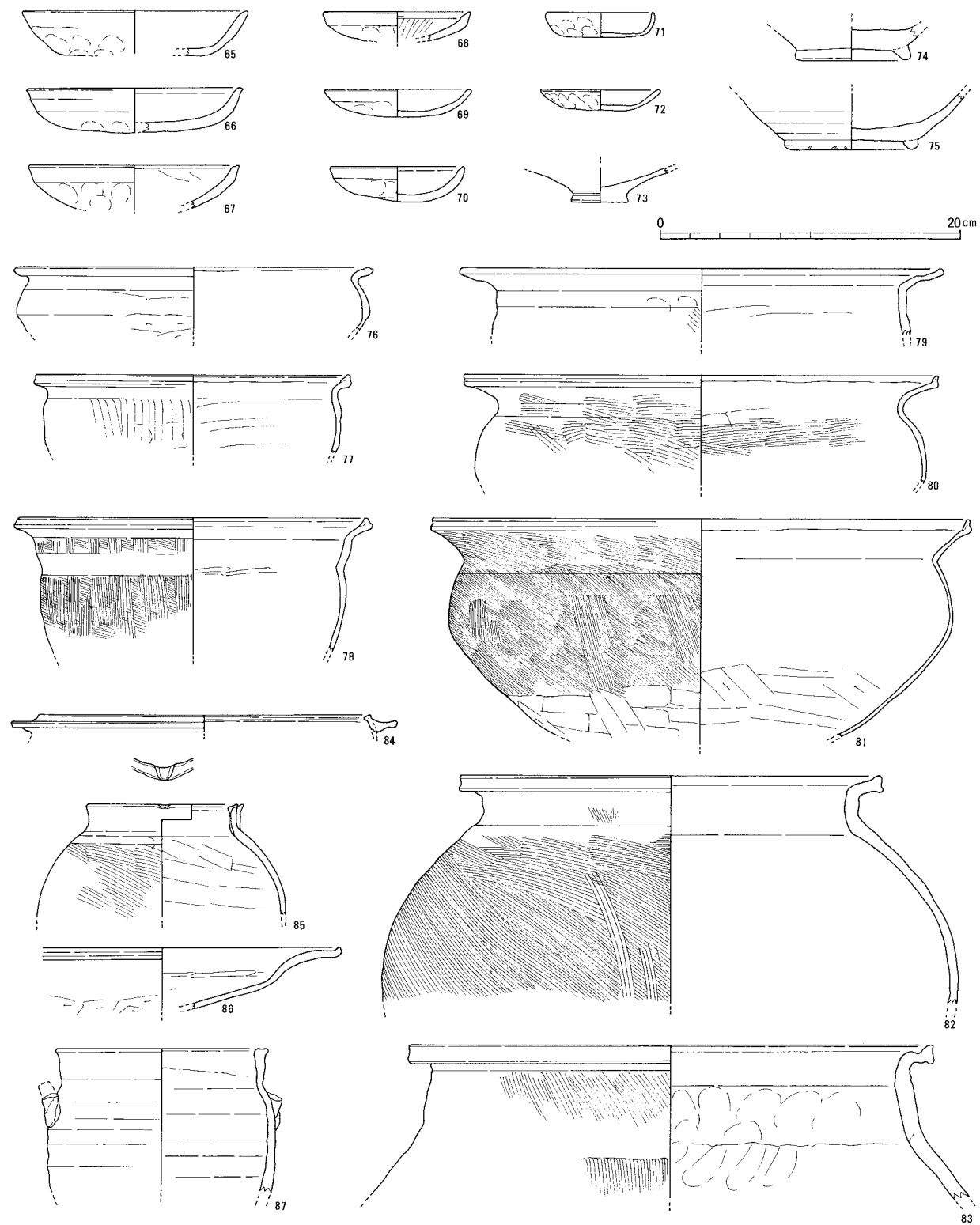
76～81は南伊勢系土師器鍋である。76は口径24cm程の底の浅い扁平な鍋である。口縁端部の折り返しは弱く、形骸化している。77～79は半球形体部を持つ鍋である。79は口縁端部の折り返しは認められず、方頭状に仕上げられる。80・81は口径32・36cmの大形の鍋である。口縁端部外面のヨコナデが強く、折り返された端部が上方に摘み上げられたように突出する。以上の鍋類は、概ね伊藤編年の第4段階c・

d 型式の範疇に収まると考えられる。

82は土師器甕である。口径より体部径が大きく、頸部は丸みを持ち、口縁部は短く開く。口縁端部外面は強いヨコナデにより、凹状の面を有する。体部外面には不定方向のハケメが密に施されるが、内面

はナデ調整のみである。伊藤裕偉氏による勢和村若宮遺跡の出土土師器器種分類でいう甕Aに相当する遺物である。

83は常滑産の甕である。口縁端部が短く外折し、外面に面を有する。中野分類による5型式に相当し、



第24図 B地区包含層等出土遺物実測図 (1 : 4)

13世紀前半代の時期が与えられている。

84は土師器羽釜である。口径は22cm程度で、口縁部・鏝部ともに短く仕上げられる。伊藤分類のB類に相当する。口縁端部は折り返されず方頭状に収められる。

85は土師器茶釜である。口径10cm程度で片口が付加されている。

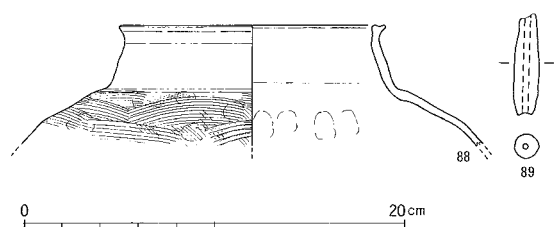
86は土師器焙烙である。底部外面はケズリ、内面は工具ナデ調整が施される。口縁端部は折り返さない。近世の遺物である。

87は瀬戸産の口広有耳壺である。口径約14cmで、口縁部はほぼ直立し、端部に面を持つ。体部最大径は口径をやや上回る程度で、体部はほとんど張り出さず、若干丸みを持つ程度である。古瀬戸後期の遺物で、15世紀代に位置付けられる遺物である。

(4)C地区の出土遺物

88は土師器茶釜である。口径は14cm程度で、口縁部はやや内傾する。端部は強いヨコナデにより、外側にやや突出する。

89は土錘である。灰黄褐色を呈し残存長は5cmあまりである。



第25図 C地区出土遺物実測図(1:4)

【註】

- ①泉雄二「齋宮跡の土器様相」(記念シンポジウム「齋宮の土器・みやこの土器」資料 齋宮歴史博物館 2000年)
- ②・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1993年)
・伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
以下、南伊勢系土師器皿の分類・編年は前記の文献に拠る。
- ③藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)
以下、山茶碗の編年については、前記の文献に拠る。
- ④・伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol. 1 1990年)
・伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年)
以下、土師器鍋の編年は前記の文献に拠る。
- ⑤中野晴久「生産地における編年について」(『常滑焼きと中世社会』小学館 1995年)
以下、常滑産甕の編年は前記の文献に拠る。
- ⑥伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1993年)
- ⑦藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年)
- ⑧伊藤裕偉『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告一第3分冊一楠ノ木遺跡』(三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)
- ⑨伊藤裕偉ほか「Ⅷ 多気郡勢和村 丹生地区内遺跡群」(『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊一』三重県教育委員会 1989年)

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
						口径	器高	その他						
1	017-05	土師器 皿	A-C1	SD12	SD2	8.1	1.1	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	粗 (4mm以下の砂粒多く含む)	並	外面：にぶい黄橙10YR7/4・内面：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
2	017-04	土師器 皿	A-B1	SD11	SD1	8.8	1.8	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	並	浅黄橙10YR8/3	口縁部 4/12	・内面煤付着
3	017-03	山茶碗	A-B1	SD12	SD2	-	-	高台径 8.0	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 3/12	・内面自然釉付着 ・底部外面系切り痕有
4	017-01	土師器 鍋	A-B5 B6	SK13	SK3	23.1	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (4mm以下の砂粒含む)	並	外面：にぶい黄橙・10YR7/4・内面：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	・外面煤付着
5	010-06	土師器 皿	B-B2	Pit1	Pit1	最大 9.7	2.0	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙10YR8/3	口縁部 9/12	
6	009-01	土師器 甕	B-B2	Pit1	Pit1	16.6	-	-	外面：ヨコナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (4mm以下の砂粒含む)	並	にぶい橙7.5YR7/4・浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 4/12	・外面煤付着
7	010-04	弥生土器 壺	B-B1	SD27	SD10	9.7	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (9本/1cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 2/12	
8	010-05	土師器 皿	B-B1	SD27	SD10	最大 10.0	1.9	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (3mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙10YR8/4	口縁部 10/12	
9	001-09	土師器 小皿	B-A7	SD20	SD2	7.8	1.0	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	やや密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 9/12	・内面工具痕有
10	001-06	土師器 小皿	B-B7	SD20	SD2	8.0	1.3	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	並	外面：灰黄 2.5Y7/2・内面：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 10/12	
11	001-08	土師器 小皿	B-B5	SD20	SD2	平均 7.9	平均 1.3	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	並	浅黄橙10YR8/3	完存	・歪激しい
12	001-07	土師器 小皿	B-B5	SD20	SD2	8.2	1.1	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR7/3	完存	・歪有
13	001-03	土師器 皿	B-A7	SD20	SD2	11.8	2.7	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙10YR8/4	口縁部 6/12	
14	001-02	土師器 皿	B-B7	SD20	SD2	12.7	2.7	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙10YR8/3・灰白10YR8/2	完存	
15	001-01	土師器 皿	B-B5	SD20	SD2	11.8	2.7	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (微砂粒含む)	並	浅黄橙10YR8/3	完存	
16	002-04	土師器 皿	B-A7	SD20	SD2	12.4	-	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	並	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	・内面墨書有
17	006-01	土師器 鍋	B-B5	SD20	SD2	38.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (13本/2cm)	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙10YR8/3・8/4	口縁部 1/12	
18	005-06	土師器 鍋	B-B7	SD20	SD2	20.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (5本/1cm)	やや粗 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰白10YR8/2・浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	・外面煤付着
19	006-02	土師器 鍋	B-B7	SD20	SD2	30.0	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密 (3.5mm以下の砂粒含む)	並	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	・内外面煤付着
20	004-03	山茶碗	B-A7	SD20	SD2	-	-	高台径 6.9	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	良	灰白 N7/0	高台部 11/12	・内面自然釉付着 ・高台初殺痕有
21	004-02	山茶碗	B-B5	SD20	SD2	-	-	高台径 7.5	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	良	灰白 10YR7/1	底部 完存	・内面自然釉付着 ・高台初殺痕有 ・底部系切り痕有 ・底部外面「の」墨書有
22	003-06	山茶碗	B-B7	SD20	SD2	-	-	高台径 6.7	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 4/12	・高台初殺痕有 ・底部系切り痕有 ・底部外面「の」墨書有
23	003-03	山茶碗	B-B7	SD20	SD2	-	-	高台径 6.2	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰白 2.5Y7/1	高台部 完存	・高台初殺痕有 ・底部系切り痕有 ・底部外面「十」墨書有
24	003-04	山茶碗	B-B6	SD20	SD2	-	-	高台径 6.5	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや粗 (3.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 5Y7/1	高台部 10/12	・高台初殺痕有 ・底部系切り痕有 ・底部外面「の」墨書有
25	003-05	山茶碗	B-B7	SD20	SD2	-	-	高台径 6.4	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	粗 (8mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 7/12	・高台初殺痕有 ・底部系切り痕有 ・底部外面「の」墨書有

第2表 出土遺物観察表 (1)

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
						口径	器高	その他						
26	003-02	山茶碗	B-A7	SD20	SD2	16.0	5.9	高台径 7.4	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	口縁部 1/12	・内面自然釉付着 ・底部系切り痕有 ・底部外面「口た」墨書有
27	003-01	山茶碗	B-B7	SD20	SD2	14.2	5.9	高台径 5.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (6mm以下の砂粒含む)	良	灰白 N7/0	口縁部 9/12	・内面自然釉付着 ・底部系切り痕有 ・底部、体部外面「の」墨書有
28	004-04	陶器 練鉢	B-A7	SD20	SD2	-	-	高台径 11.7	外面：ロクロナデ・ケズリ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 2/12	・内面自然釉付着
29	004-05	陶器 練鉢	B-A7 B7	SD20	SD2	-	-	高台径 14.1	外面：ロクロナデ・ケズリ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや粗 (2.5mm以下の砂粒含む)	良	黄灰 2.5Y6/1	高台部 3/12	・高台粉殻痕有
30	004-01	陶器 甕	B-A7	SD20	SD2	-	-	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	やや密 (2mm以下の砂粒含む)	良	灰 N5/0・4/0	口縁部 小片	・外面自然釉付着 ・常滑産
31	001-05	土師器 小皿	B-B8	SZ19	SZ1	8.7	1.4	-	外面：オサエ 内面：ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 3/12	
32	001-04	土師器 小皿	B-B8	SZ19	SZ1	9.0	1.7	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 3/12	
33	002-02	土師器 鍋	B-B8	SZ19	SZ1	16.0	-	-	外面：ヨコナデ・ミガキ・ケズリ、内面：ヨコナデ・ミガキ・ナデ・ケズリ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 4/12	・外面煤付着
34	002-01	土師器 茶釜	B-B8	SZ19	SZ1	12.2	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (10本/2.3cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	灰白2.5Y7/1・黄灰 2.5Y6/1	口縁部 4/12	・内面にタール状の煤付着
35	002-03	陶器 甕	B-A8	SZ19	SZ1	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ・オサエ	密	良	にぶい赤褐 2.5YR4/3・にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 小片	・常滑産
36	010-03	土師器 碗	B-A5	SD22	SD4	-	-	底部径 6.8	外面：ナデ・ハケメ 内面：工具ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	底部 10/12	・底部葉状圧痕有 ・底部一部黒変
37	009-06	土師器 鍋	B-B5	SD22	SD7	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	やや密	並	外面：にぶい橙 7.5YR7/4・内面：浅黄橙 10YR8/3	口縁部 小片	・外面煤付着
38	009-03	土師器 皿	B-B1	SK28	SK11	9.2	2.1	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 5/12	
39	009-02	土師器 皿	B-B1	SK28	SK11	9.1	2.2	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部 4/12	
40	009-05	土師器 鍋	B-B1	SK28	SK11	-	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	灰白10YR8/2	口縁部 小片	
41	010-07	陶器 縁釉小皿	B-B1	SK28	SK11	11.0	2.7	底部径 5.2	外面：ロクロナデ・施釉 内面：ロクロナデ・施釉	密	良	胎：灰白5Y5/1 釉：にぶい褐～黒 7.5YR5/3～2/1	口縁部 1/12	・瀬戸産
42	009-04	土師器 皿	B-B5	SK24	SK6	12.1	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 3/12	
43	009-07	土師器 鍋	B-B5	SK24	SK6	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 小片	・外面煤付着
44	006-07	土師器 小皿	B-B6	SD25	SD8	8.1	1.45	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密 (1mm以下の微砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/4	完存	
45	006-06	土師器 小皿	B-B6	SD25	SD8	8.0	1.6	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密 (1mm以下の微砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/3	完存	
46	006-05	土師器 小皿	B-B6	SD25	SD8	6.7	1.3	-	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密 (2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/3	完存	
47	008-06	白磁 小皿	B-B5	SD25	SD8	9.2	2.2	高台径 4.4	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ後施釉 内面：ロクロナデ後施釉	密	良	胎：灰白2.5Y7/1 釉：灰白5Y7/1	高台部 完存	・重ね焼き痕有
48	008-05	天目茶碗	B-B5	SD25	SD8	12.5	6.0	高台径 3.9	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ後施釉 内面：ロクロナデ後施釉	密	良	胎：にぶい黄橙 10YR7/3・釉：暗赤 灰10R4/1、灰褐 5YR4/2	口縁部 1/12	・瀬戸産
49	010-02	加工円盤	B-B5	SD25	SD8	-	-	高台径 4.8	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ後施釉	密	良	胎：灰白10YR7/1 釉：オリーブ黄 7.5Y6/3	高台部 3/12	・瀬戸産陶器平碗の高台部を加工 ・重量30g
50	005-02	土師器 鍋	B-B3	SD25	SD8	22.2	-	-	外面：ヨコナデ・オサエ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ・ケズリ	密 (1mm以下の微砂粒含む)	並	灰白10YR8/2・浅黄橙 10YR8/3	口縁部 3/12	

第3表 出土遺物観察表 (2)

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	法量 (c m)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
						口径	器高	その他						
51	005-04	土師器 鍋	B-4	SD25	SD8	21.0	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ・ハケメ (12本/1cm)	密(1mm以下の 微砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/4・10YR8/3	口縁部 3/12	
52	005-05	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	20.0	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ ・ケズリ 内面:ヨコナデ・ナデ・ケズリ	やや密(2mm 以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
53	005-03	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	19.6	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ ・ケズリ、内面:ヨコナデ・ ハケメ(9本/1cm)・ケズリ	やや密(2.5 mm以下の砂粒 含む)	並	灰白10YR8/2・浅黄 橙10YR8/4・灰黄褐 10YR6/2	口縁部 3/12	
54	006-03	土師器 鍋	B-4	SD25	SD8	23.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ(7本 /1cm)・ケズリ 内面:ヨコナデ・ナデ・ケズリ	密(1mm以下の 微砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
55	005-01	土師器 鍋	B-4	SD25	SD8	23.8	-	-	外面:ヨコナデ・オサエ・ハケ メ(9本/1cm)後ケズリ、内面: ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 3/12	
56	006-04	土師器 鍋	B-4	SD25	SD8	21.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ(8本 /1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部 1/12	・外面煤付着
57	010-01	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	30.1	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	明褐灰 7.5YR7/2	口縁部 1/12	・外面煤付着
58	007-02	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	33.6	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ(7本 /1cm) 内面:ヨコナデ・工具ナデ	密	並	灰黄褐 10YR5/2・4/2	口縁部 3/12	・外面煤付着
59	007-01	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	34.2	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ(6~ 7本/1cm) 内面:ヨコナデ・工具ナデ	密	並	灰黄褐 10YR6/2・5/2	口縁部 3/12	・外面煤付着
60	007-03	土師器 鍋	B-5	SD25	SD8	34.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ(6本 /1cm) 内面:ヨコナデ・工具ナデ	密	並	灰白10YR8/2・にぶ い黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	・外面煤付着
61	008-04	土師器 蓋	B-5	SD25	SD8	16.0	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	にぶい橙 7.5YR7/3・灰褐 7.5YR5/2	口縁部 2/12	・外面煤付着
62	008-02	土師器 茶釜	B-5	SD25	SD8	14.6	-	-	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 4/12	
63	008-01	土師器 羽釜	B-4	SD25	SD8	33.8	-	鈔部径 40.0	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・オサエ・工具 ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	・外面煤付着
64	008-03	土師器 羽釜	B-4	SD25	SD8	22.4	-	鈔部径 24.4	外面:ヨコナデ・ナデ・ハケメ (3本/0.5cm) 内面:工具ナデ	密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	・外面煤付着
65	012-04	土師器 皿	B-1	包含層	包含層	15.1	3.0	-	外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや密(微砂 粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 3/12	
66	012-08	土師器 皿	B-1	包含層	包含層	14.5	3.0	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 3/12	
67	012-07	土師器 皿	B-1	攪乱溝	攪乱溝	14.2	-	-	外面:ヨコナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 4/12	・口縁端部内面に工 具痕有
68	012-09	土師器 小皿	B-1	包含層	包含層	9.8	-	-	外面:ヨコナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 4/12	
69	012-06	土師器 小皿	B	西壁	西壁	9.9	1.9	-	外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや粗	並	浅黄橙10YR8/3・に ぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完存	
70	012-05	土師器 小皿	B-1	包含層	包含層	9.0	2.3	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 9/12	
71	015-02	土師器 小皿	B	包含層	灰黄粘土 中	最大 7.4	1.7	-	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 10/12	
72	011-06	土師器 小皿	B-1	攪乱土坑	攪乱土坑	8.0	1.4	-	外面:オサエ 内面:ナデ	密	並	橙 5YR6/6	完存	・口縁端部に油煙付 着(灯明皿)
73	011-07	ロクロ 土師器 小皿	B	西壁	西壁	-	-	高台径 3.8	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	高台部 完存	・底部系切り痕有
74	011-05	山茶碗	B-1	包含層	包含層	-	-	高台径 7.8	外面:ロクロナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	高台部 ほぼ完存	
75	011-04	山茶碗	B-1	包含層	包含層	-	-	高台径 9.0	外面:ロクロナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	やや密	良	灰褐 7.5YR6/2	高台部 4/12	・内面平滑 ・底部系切り痕有 ・高台初段痕有

第4表 出土遺物観察表(3)

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
						口径	器高	その他						
76	012-03	土師器鍋	B	東壁側溝	東壁側溝	24.0	-	-	外面：ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12	・外面煤付着
77	011-02	土師器鍋	B	東壁側溝	東壁側溝	21.2	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (3本/1cm) 内面：ヨコナデ・工具ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	・外面煤付着
78	012-01	土師器鍋	B	東壁	東壁	24.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (8本/1cm)縦ハケ後横ハケ・ナデ、内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	・外面煤付着
79	011-03	土師器鍋	B-1 B5	包含層	包含層	32.4	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 2/12	・外面煤付着
80	016-01	土師器鍋	B	包含層	灰黄粘土中	31.8	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (5~6本/1cm) 内面：ヨコナデ・ハケメ?	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 2/12	・外面煤付着
81	015-01	土師器鍋	B	包含層	灰黄粘土中	36.2	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (10本/1cm)・ケズリ、内面：ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	密	並	浅黄橙10YR8/3・にぶい黄橙10YR7/3・灰黄橙10YR5/2	口縁部 6/12	・外面煤付着
82	014-02	土師器甕	B	表土	表土	28.2	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (10~12本/2cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	・外面煤付着
83	013-01	陶器甕	B	表土	表土	35.1	-	-	外面：ヨコナデ・板ナデ後ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面：褐7.5YR4/3 内面：灰黄褐 10YR4/2	口縁部 2/12	・常産
84	014-01	土師器羽釜	B	表土	表土	22.2	-	鈎部径 25.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	並	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部 2/12	・外面煤付着
85	011-01	土師器茶釜	B	東壁側溝	東壁側溝	10.2	-	-	外面：ヨコナデ・オサエ・ハケメ (5本/1cm) 内面：ヨコナデ・工具ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/3・6/3	口縁部 3/12	・片口付き
86	012-02	土師器焙烙	B-1 B6	包含層	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	密	並	にぶい赤褐 5YR5/3	口縁部 片	・外面煤付着
87	013-02	陶器口広有耳壺	B	表土	表土	14.2	-	-	外面：ロクロナデ・施釉 内面：ロクロナデ・施釉	密	良	胎：にぶい黄2.5Y6/3 釉：黒N1.5/暗褐 10YR3/3・暗褐7.5YR3/3	口縁部 3/12	・瀬戸産
88	017-02	土師器茶釜	C-1 A2	SK30	SK2	14.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (6本/1cm)・オサエ 内面：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	外面：にぶい黄橙 10YR7/3・内面：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 4/12	・外面に煤付着
89	017-06	土錘	C	表土	表土	残存長 5.3	最大幅 1.3	残存重 9.23g	ナデ	やや密 (1mm以下の砂粒含む)	並	灰黄褐 10YR5/2	ほぼ完形	

【凡 例】

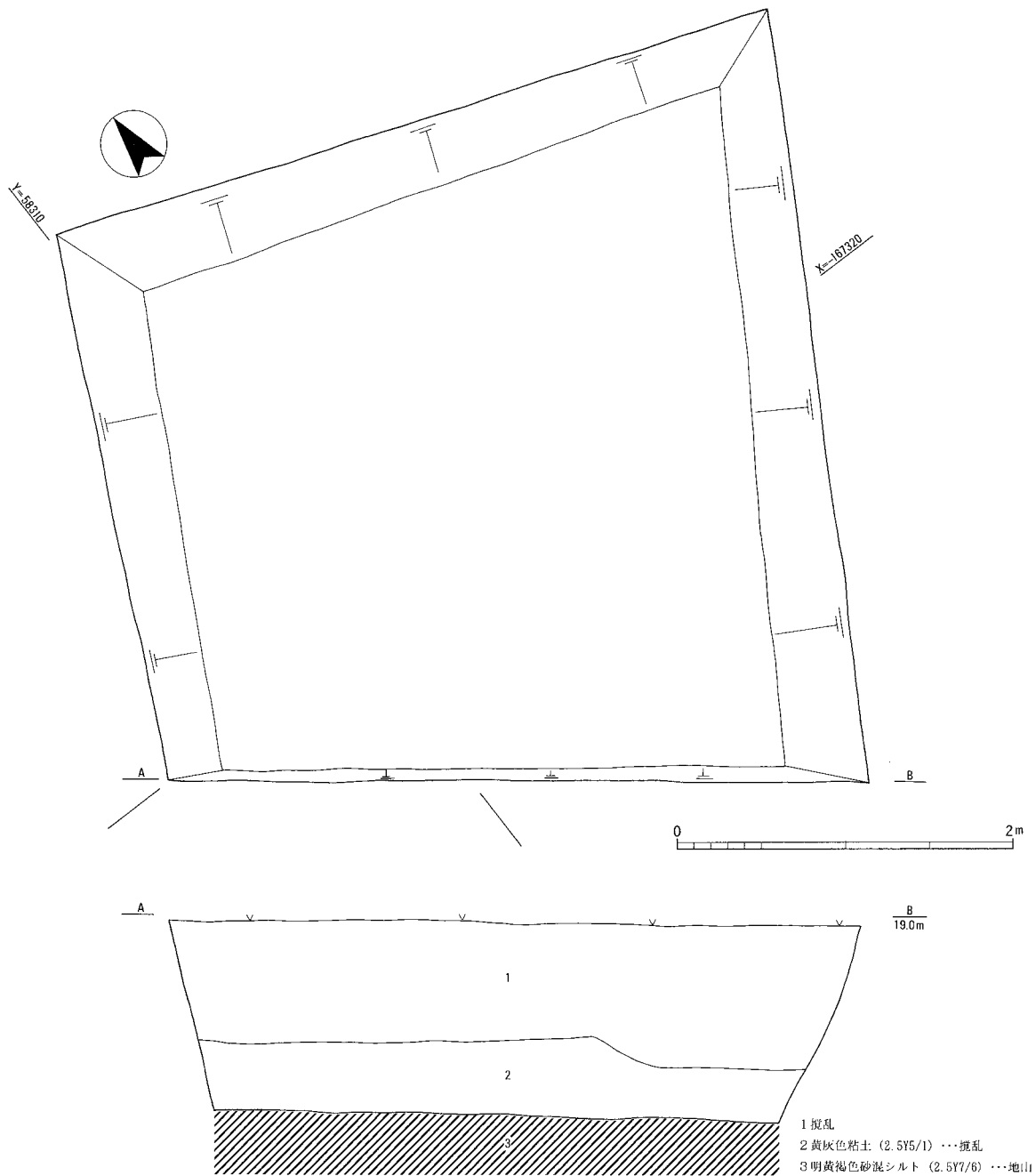
- ・遺物番号：挿図掲載番号。
- ・登録番号：実測段階の登録番号。
- ・出土地区：調査区及びグリッド名。〔 (A (調査区) - B1 (グリッド)) 〕
- ・出土遺構：報告書の遺構番号等。
- ・出土位置：調査時の遺構番号等。
- ・色 調：『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残 存 度：当該部位を12分割した際の残存度。

第5表 出土遺物観察表 (4)

IV 第3次調査

調査対象地は、第2次調査B地区の南側に隣接する酒類販売店の住宅兼用店舗跡地で、第2次調査の調査区名を踏襲し、当該調査区をD地区とした。調査は、建物撤去後の工事施工時に立会い調査として

実施した。調査の結果、建物の基礎工事の際に遺構面は破壊されており、遺構・遺物ともに確認できなかった。



第26図 D地区平面図・土層断面図 (1 : 40)

V 結 語

今回の調査は道路の拡張部分のみが対象となったが、調査区が4地区に分散し、各調査区の面積も狭小のため、調査としては断片的なものとなった。また、検出遺構・出土遺物ともに少なく、調査成果は限定的なものであるが、以下に検出遺構及び出土遺物について若干の考察を行い、結語としたい。

今回の調査で検出した遺構は、性格不明のものが多く、A地区のSD11・12、B地区のSD20・26・27、C地区のSD29などは区画溝と認識できる遺構である。中でもA地区のSD11・12は現在の地割と概ね一致しており、特筆される。出土遺物からSD11は15世紀代、SD12は12世紀末～13世紀初頭の遺構と判断したが、中世初頭以来の地割が代々継承され、現在もそれが踏襲されていると言えよう。当該調査区の筋向いには永正年中(1504～21年)創建とされる光明山三縁寺が所在し、SD11・12が当該寺域の外側に延長することが推定されることから、当該寺院の建立にもこの地割の規制が働いた可能性がある。

出土遺物の中で特筆すべきものとして、包含層出土の土師器甕(82)が挙げられる。この遺物には被熱痕跡が認められ、煮炊に使用されたと推定される。同様の甕がある程度まとまって出土した勢和村若宮遺跡の場合、いずれも被熱痕跡は認められず、貯蔵等を用途とする器種と推定され、土器の付着物の化学分析及び、遺跡の所在地の特性から、水銀生産に関連する容器と想定されている。また、これ以外の出土例として、玉城町砂谷遺跡で2個体出土しているが、やはり被熱痕跡は認められていない^③。一方、多気町立岡山中世墓群でも2個体の出土例があるが、ここでは蔵骨器として使用されており、その内の1個体の外面には煤が付着している^④。この場合、他の用途で使用されていたものが蔵骨器に転用されたと考えられるが、外面に煤が付着しているものがあることから、煮炊等にも使用されたと推定される。管見の限り、これら4遺跡以外に出土例は見出せないため詳細は不明であるが、遺物の所属時期は中世後期と推定され、貯蔵・煮炊のどちらの用途にも使

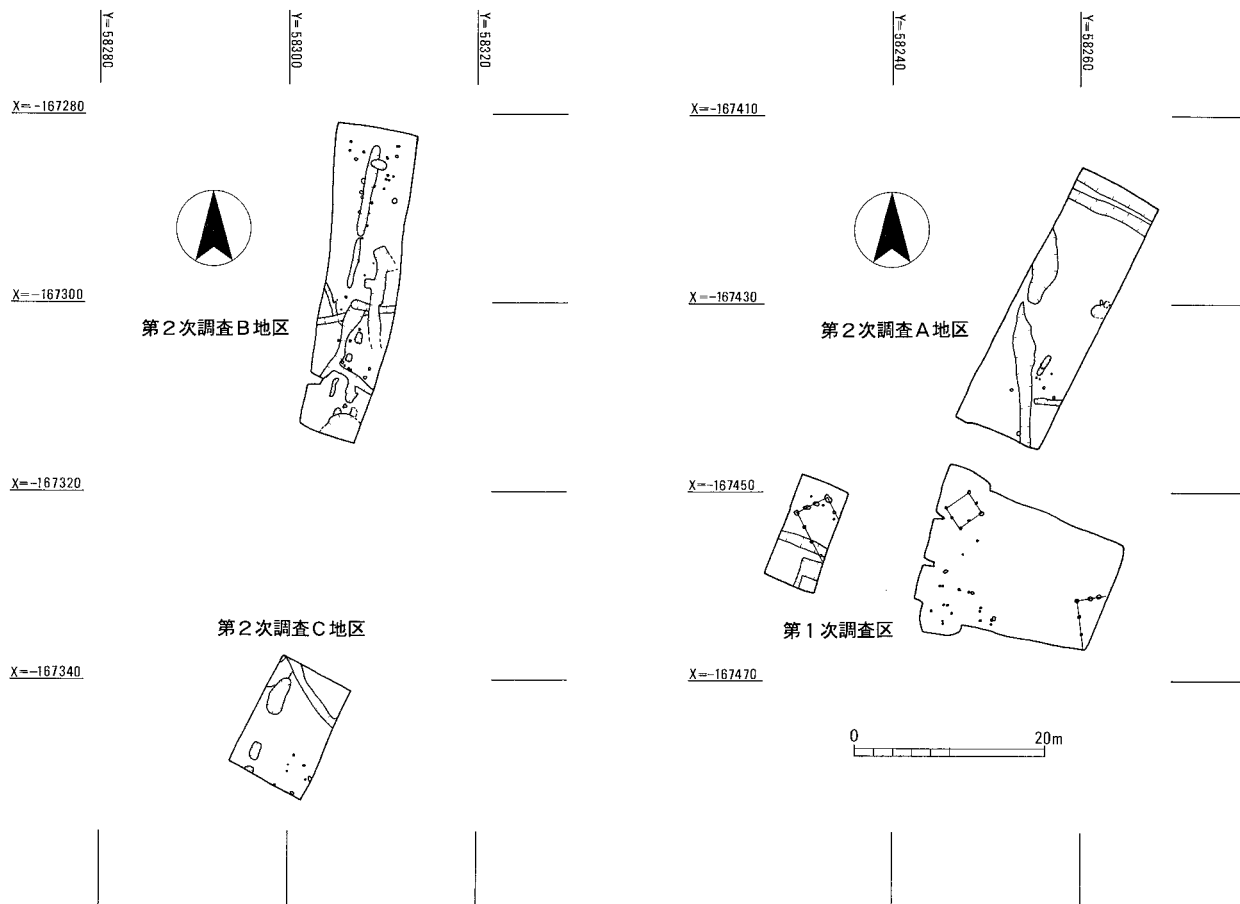
用されていたと思われる。ただし、貯蔵容器としては陶器製品が、煮沸用具としては土師器の鍋・羽釜の類が普遍的に存在していた時期であり、出土地点が隣接する現玉城町・多気町・勢和村の限られた範囲内であることから、南伊勢地域の中でもかなり限定的な範囲で使用された稀有な土器と言えよう。

今回の調査は極めて断片的なものであったが、出土遺物から古代～近世の営為の跡が確認できた。遺構は性格不明のものが多く、時期は概ね鎌倉～室町時代に推定されることから、中世の集落遺跡と評価できよう。田丸城の西に位置する波瀬B遺跡では、平成3年度の調査で15～16世紀の掘立柱建物群が確認されており、小林秀氏は文献で確認できる北畠氏設置の関所及びその付随施設との関連を想定している^⑤。さらに同氏は、同文献の記述より、15世紀末頃には城下に多くの人家が存在していたと想定している。田丸城の東方に位置する佐田南浦遺跡は想定されているような当該期集落の一部と考えられよう。

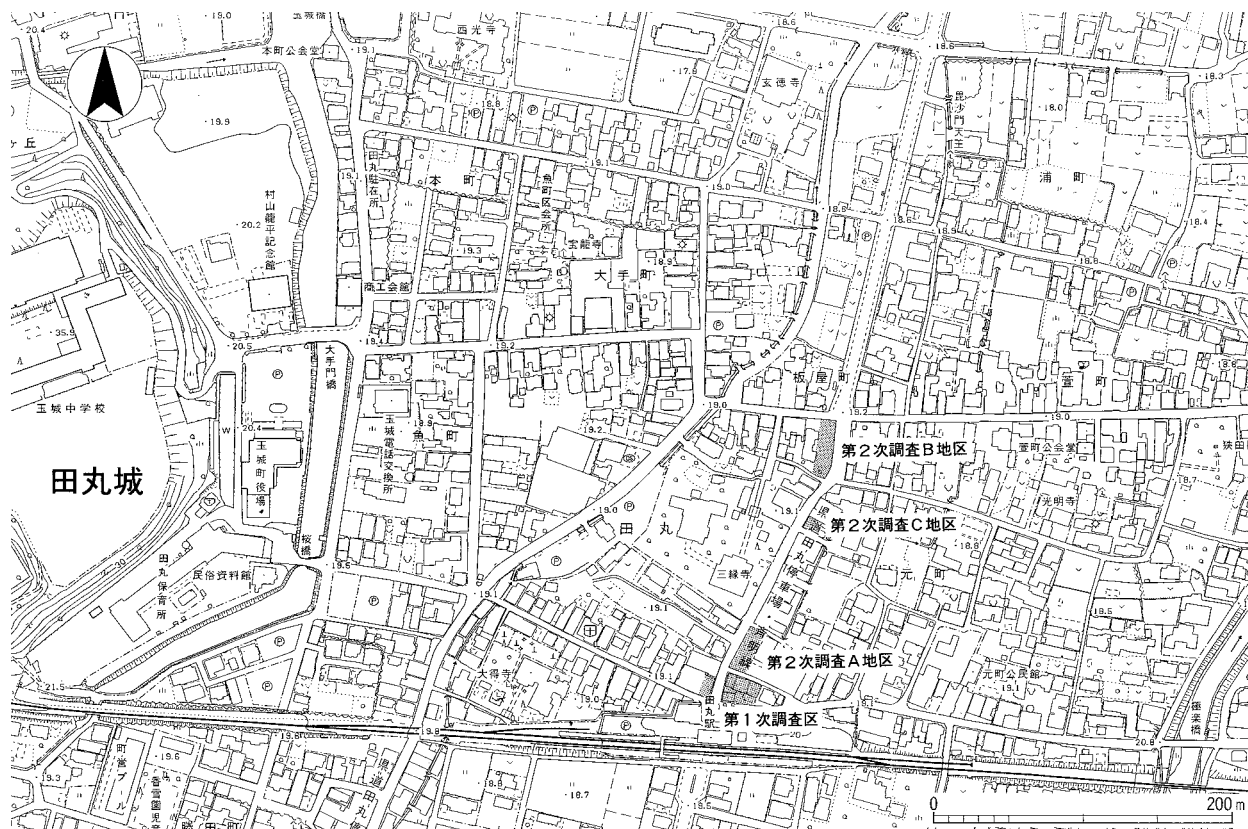
当遺跡周辺は住宅密集地ということもあり、遺跡の分布や広がりも現状では掴みづらい状況にあるが、今回調査区の南側に位置する第1次調査区でも、中世の集落跡が確認されており、北畠氏支配下の田丸城周辺の景観を考える上で、今後の資料の増加が待たれるところである。

【註】

- ①『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ②伊藤裕偉ほか「Ⅷ 多気郡勢和村 丹生地区内遺跡群」(『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊一』三重県教育委員会 1989年)
- ③中西正典ほか『砂谷遺跡発掘調査報告』(玉城町教育委員会 1988年)
- ④中里 守『一立岡山中世墓群一埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』(多気町教育委員会 1997年)
- ⑤上村安生『波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- ⑥小林 秀『第二編沿革 第三章中世』(『玉城町史 上巻』玉城町 1995年)



第27図 第1次・第2次調査遺構平面図 (1 : 800)



第28図 調査区位置図 (1 : 5,000)

写 真 图 版



A地区全景（北東から）



A地区SK13・SK18完掘状況（北東から）

図版2



A地区SD11・SD12（南東から）



A地区SD11・SD12（南から）



B地区調査前状況（北東から）



B地区全景（北から）

図版 4



B地区S A21柱痕出土状況（東から）



B地区S D20遺物出土状況（北西から）



C地区調査前状況（北から）



C地区全景（南西から）

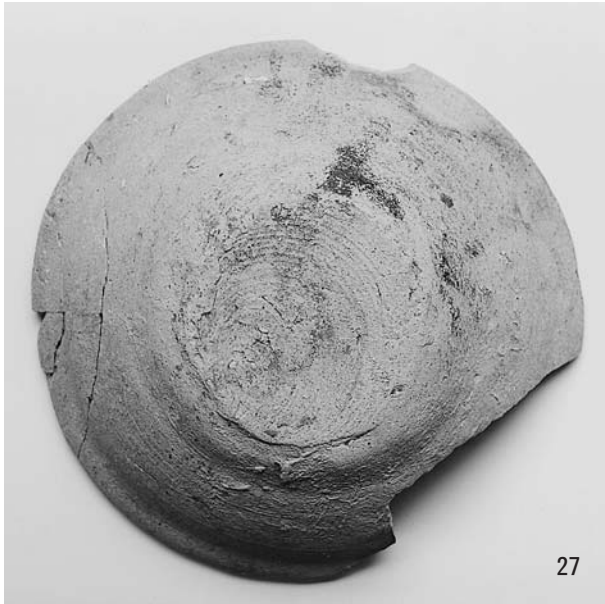
図版6





図版8





出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	さたみなみうらいせきだいにじだいさんじはつくつちようさほうこく						
書名	佐田南浦遺跡（第2次・第3次）発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	262						
編著者名	小山 憲一						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	西暦 2005年12月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 ° / "	東経 ° / "	調査期間	調査面積	調査原因
さたみなみうらいせき 佐田南浦遺跡	みえけんわたらいぐんたま 三重県度会郡玉 きちうきたあざがうら 城町佐田字南浦	市町村	34 29 23	136 38 05	20031016	520㎡	平成15・17年 度玉城駅前線 地方特定道路 整備事業
		204			20040115		
		遺跡番号			20050715		
		555			15㎡		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
佐田南浦遺跡	集落跡	鎌倉時代 ∩ 室町時代	土坑・溝	土師器・墨書土 器・山茶碗・陶 磁器	出土遺物量 51.7kg		
要 旨	三重県指定史跡田丸城の東方に広がる中世の集落跡。						

三重県埋蔵文化財調査報告 262

佐田南浦遺跡（第2次・第3次）
発掘調査報告

2005（平成17）年12月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
